

平成26年度版

平成24年度採択 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」

# 成果報告書

学校法人藤ノ花学園

豊橋創造大学短期大学部

## 目次

巻頭言	1
はじめに	2
1. 『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』概要説明	3
2. 文部科学省申請概略	7
3. 事業グループ活動報告	13
3. 1 4つの教育事業	15
(1) 長期にわたる就職活動に耐え抜くための「メンタルタフネス講座」の実施	17
(2) アクティブラーニングを活用した「自己理解促進講座」の実施	21
(3) 地域組織と連携した「プロジェクト活動」	25
(4) 「アクティブラーニング」の手法を使った教育経験の共有	31
3. 2 教育体制・産業界ニーズ把握体制の整備・連携推進	37
(1) 教育体制・産業界ニーズ把握体制の整備	39
(2) 連携事業を反映した体制整備	40
3. 3 教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援	45
(1) ユビキタスキャンパスグループ	47
(2) 大学コミュニティグループ	55
4. 全体の総括	65
5. 補助資料	69
① プロジェクト活動成果報告書（教員）	71
② 2015年度中部圏産学連携会議 ポスター発表資料	101
③ 大学教育改革フォーラム in 東海2015 発表資料	105
④ プロジェクト活動 連携企業・団体一覧	109
⑤ 各種発行パンフレット	113
⑥ 行事実績一覧	117





## 巻頭言

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」  
事業推進代表者

学長 伊藤 晴康

豊橋創造大学・豊橋創造大学短期大学部は、地域密着型の高等教育機関として、藤ノ花学園の伝統である実践的教育を受け継ぎ、地域に貢献できる職業人を育成している。

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」に参画している情報ビジネス学部キャリアデザイン学科、経営学部経営学科及び短期大学部キャリアプランニング科は、共に幅広い専門的職業人を育成することを目的として設置された学科である。各学科の教育目標は下記の通り学則に定められている。

### 情報ビジネス学部キャリアデザイン学科

生涯にわたっての高い就業能力をつけさせるため、健全な職業観と就業意識を育成し、経営学と情報学を基盤として時代の要請に沿った専門的職業教育を施すことを目標とする。

### 経営学部経営学科

生涯にわたっての高い就業能力を身につけさせるため、健全な職業観と就業意識を涵養し経営学と情報学の専門知識とスキルを持つ専門的職業人の育成を目標とする。

### 短期大学部キャリアプランニング科

短期大学部の教育理念に則り、社会人として求められる教養やマナーを身につけさせると同時に、健全な職業観、就業意識を育成し、情報学を基盤として時代の要請に沿った職業的教育を施すことを目標とする。

上記の教育目標に沿い、学生の就業能力を高めるために、地域の産業界と連携した実践的な教育プログラムとして実施された教育活動をまとめたものが本誌である。就業力育成のための実践的な教育の取り組み事例として、多くの方々に情報を提供できれば幸いである。このような地道な教育の積み重ねにより、地域に人材育成の面で貢献する大学として、今後も努力を継続したい。

2015年3月



## はじめに

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」  
事業推進責任者

豊橋創造大学経営学部長 佐藤 勝尚

本報告書は、平成 24 年文部科学省にて採択された『産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業』の平成 26 年までの 3 年間の活動とその成果を取りまとめたものである。この事業は、三重大学を代表校とした中部圏 23 大学による「アクティブラーニングを通じた教育力」および「地域・産業界との連携力」を通して、教育改革力を強化する取組である。本学経営学部ならびに短期大学部キャリアプランニング科は、東海 A チームに属して幹事校と副幹事校からなる中部地域大学教育改革推進委員会の調整のもと、連携 FD を通して教育改革の実践過程で生まれる成功と失敗を共有しつつ教育力を高め、中部圏産学連携会議を通して、大学が育成しようとする資質と地域・産業界のニーズに関する対話を行うために『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』を展開するものである。このプロジェクトでは地域・産業界のニーズに対応した能力を育成するため、学生参加型授業、共同学習、課題解決学習や PBL などを教育現場に取り入れ、就業力に関わる学生の能動性を高める改革を進めるとともに社会現場での実践教育としてのインターンシップを高度化するものである。

本学では『大学生の就業力育成支援事業』として、これまで情報ビジネス学部・経営学部と同短期大学部キャリアプランニング科が共同で取り組んできた「持続型職業人 SOZO プロジェクト事業」を発展させ、『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』として次の 4 事業を柱とした事業展開を進め、学生の総合的な「就業力」の育成を図るものである。

豊橋創造大学短期大学部

### 地域産業界連携教育力改革プロジェクト

- ① 長期にわたる就職活動を耐え抜く「メンタルタフネス育成講座」の実施
- ② アクティブラーニングを活用した「自己理解促進講座」の実施
- ③ 地域組織と連携した「プロジェクト活動」
- ④ 「アクティブラーニング」の手法を使った教育経験の共有

本報告書をご覧いただき、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

2015 年 3 月

# 『地域産業界連携教育力改革 プロジェクト』概要説明



# 1. 『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』の概要

## 1. 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

本事業は、産業界のニーズに対応した人材育成を大学や短期大学などの高等教育機関で実施する体制整備を進めるための補助事業として、平成 24 年度に文部科学省に創設された事業である（以下「産業界ニーズ補助事業」と呼ぶ）。中部圏では、「アクティブラーニングを通じた教育力強化」と「地域・産業界との連携力強化」を目的とした 23 大学の共同事業として申請し、採択されている。

中部圏 23 大学では、主に教育改革力を探求する「東海 A（教育力）チーム」、産業界ニーズ把握方法を探求する「東海 B（産業界ニーズ把握）チーム」、「北陸地域チーム」、「静岡地域チーム」の 4 グループに分けて、教育方法や産業界ニーズ把握方法について考え方や方法論を取りまとめるとともに、それらを共有することによって、教育力向上を目指す事業になっている。

豊橋創造大学短期大学部は、「東海 A（教育力）チーム」に所属している。

## 2. 地域産業界連携教育力改革プロジェクト

豊橋創造大学短期大学部では、「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備」（産業界ニーズ補助事業）への参画にあたって、育成すべき資質と教育体制および産業界ニーズ把握方法について検討し、「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」（Chiiki sangyokai renkei Kyoikuryoku kaikaku Project 略称して CKP と呼ぶ）を立ち上げ、教育体制・産業界ニーズ把握体制を整備することになった。

本学では、社会人基礎力・就業力育成を目指し、そのための教育システムの構築を行う。また、人材育成に関する産業界のニーズを把握し、それを教育システムに反映させる体制整備を行う。

具体的には、3 つの分野に分けて整備することにした。

- ( I ) 4 つの教育事業
- ( II ) 教育体制・産業界ニーズ把握体制の整備
- ( III ) 教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト（CKP）」では、教員と事務職員とで 7 つのグループを形成し、円滑な運営のために CKP 委員会を設置して、意思疎通を図っている。

これらの機能全体は図 1. 1 にまとめてある。

## 3. 地域産業界連携教育力改革プロジェクトの実施体制

本学では「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備補助事業」を「地域産業界連携教育力改革プロジェクト（CKP）」として実施する。「アクティブラーニングを通じた教育力強化」と「地域・産業界との連携力強化」を連携校の共通目的とし、本学は、社会人基礎力・就業力を育成する教育体制整備および産業界ニーズの把握のために、3 分野、7 つのグループに役割を分担して事業展開する。

- ( I ) 4 つの教育事業
  - ①長期にわたる就職活動を耐え抜くための「メンタルタフネス育成講座」の実施
  - ②アクティブラーニングを活用した「自己理解促進講座」の実施



- ③地域組織と連携した「プロジェクト活動」の実施
  - ④「アクティブラーニング」の手法を使った教育経験の共有
  - (Ⅱ) 教育体制・産業界ニーズ把握体制の整備
    - ⑤連携事業推進
  - (Ⅲ) 教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援
    - ⑥ユビキタスキャンパス
    - ⑦大学コミュニティ
- 7つの事業グループの詳細は、3章以降で説明する。

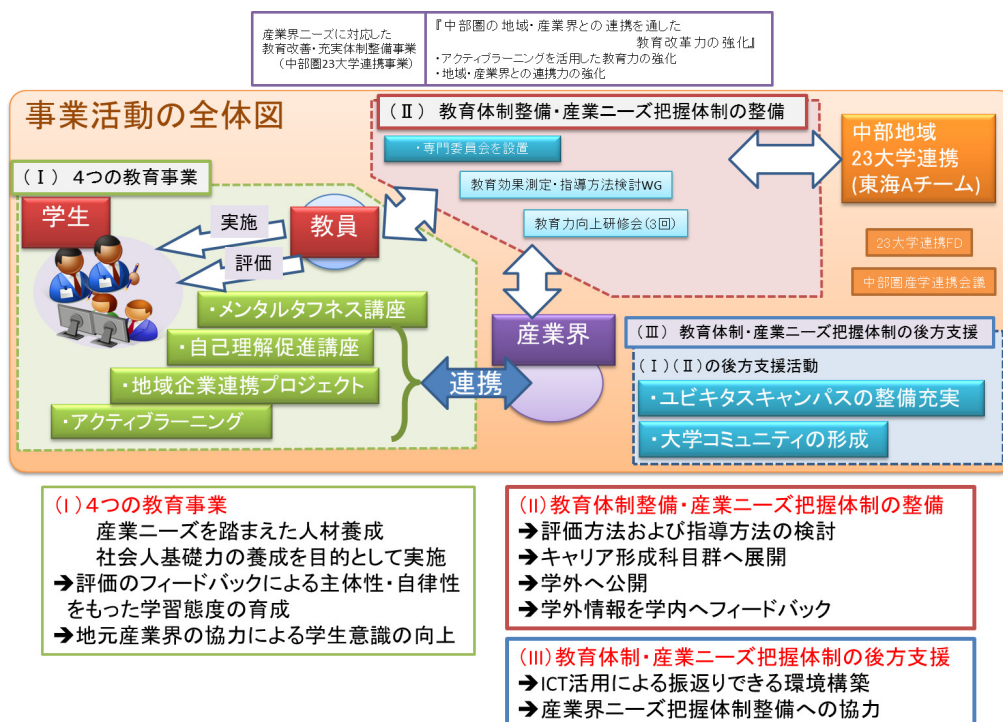


図1. 1 地域産業界教育力改革プロジェクト(CKP)全体機能図(短期大学部)

7つのグループ活動を統括するCKP委員会は、毎月1回の頻度で定例会議を開催している。その会議では、学習成果が議論され、予算の執行状況が報告されている。学習成果を向上・充実するためにPDCAサイクルを日常的に稼働させ、学習成果を評価するようにしている。毎年11月には、当該年度の振り返りをし、それを基に次年度の事業計画を策定し、年間スケジュールと予算を組み、年度末には成果報告書を作成している。

#### 4. 情報公開について

CKP事業の実施状況については、適宜、本学のホームページで公開している。

毎年度末には「成果報告書」を作成しており、取組内容の概要・活動成果を紹介し、今後の活動への課題点を明らかにすることでPDCAサイクルを効果的に機能させている状況を公開している。

「成果報告書」については「簡易版」を作成し、「プロジェクト活動」の概要を報告するリーフレットを広く配布し、本事業活動を積極的に広報している。

# 文部科学省申請概略





文部科学省 大学教育改革推進事業

「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」

### 中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育改革力の強化 本学取組について

本学取組名称	地域産業界連携教育力改革プロジェクト
選定年度	平成 24 年度
<p>○学生の社会的・職業的自立のための取組のこれまでの実績について</p> <p>・これまでどのような方針・視点を持って取組を実施してきたか</p> <p>豊橋創造大学短期大学部キャリアプランニング科の教育目標は、「社会人として求められる基礎学力、教養やマナーを身につけさせると同時に、健全な勤労観、職業人意識を育成し、時代の要請に沿った専門的教育を施し、社会に貢献できる人材を養成すること」である。その教育目標を達成するためのカリキュラム構成であるが、受け入れる入学生が希望する将来の進路の多様化に対応するためにいくつかの専門ユニット群を用意する一方で、どの分野に進むにしろ社会人として要求される基礎力を培うためにコアユニットを設けている。全員必修のコアユニットでは、いわゆる社会人基礎力を養成するため、ビジネス文書を中心とした文書作成能力、計算・論理的思考力、情報リテラシー、経営の基礎、実務英語、マナーなどを修得する授業を、演習を取り入れながら実施している。教員は一方向的な授業にならないように工夫し、ことあるごとに学生が苦手とする発表を課し、学生の側も授業に積極的に参加し、社会から要請されているコミュニケーション力を伸ばせるような機会を提供している。本科の名称を冠する「キャリアプランニングⅠ／Ⅱ」および「ビジネス実務総論」の授業では、働く意味を考えさせ、健全な勤労観、プロ意識、責任感といった職業人意識を身につけさせ、将来の職業的自立を支援する取組の基盤としている。これまでのすべての取組は、学生を人間的に成長させ、成熟させ、自立した人生を送ってほしいという意図から実施しており、従来から、上記の正課の授業と連携して、就職率を向上させ早期離職者を減少させるための課外活動を実施してきている。現在、ほとんどの大学が実施しているインターンシップについては、「インターンシップ」という言葉が流行る以前から「企業実務実習・病院事務実習」として実施してきている。また、時には学外の社会人講師を招き、学生に実社会を紹介する講演会を実施してきた。例としては、前早稲田大学ラグビー部監督・中竹竜二氏による「挫折と挑戦」というテーマでの講演会、東愛知日産社長・青木公貞氏による具体的雇用環境についての講義などがあげられる。</p> <p>平成 21～22 年度・大学教育・学生支援推進事業【テーマ B】では、「正課の授業と連携した総合的なキャリア教育支援」をテーマとして取組み、これまでの活動を学生が順序立てて学んでいけるような体系に整備した。具体的には6つの柱、「コミュニケーション力育成」「職業人意識の醸成」「自己理解」「ビジネスマナーの修得」「就職情報提供」「教員のFD研修」をキーワードとして諸活動を充実させ、学生の社会的・職業的自立を後押しする仕組みをつくりあげた。現在でも、それらを継続し、より発展・充実させて実施している。</p> <p>平成 18～20 年度・現代的教育ニーズ取組支援プログラムでは、「食をテーマとした地域活性化」という取組で、地域貢献を伴う実践的教育を行った。「食農教育」「食文化の伝達」「福祉サービス」「災害時炊き出しボランティア」という4つの分野で3年間にわたりいろいろな活動をした。「食文化の伝達」活動の中で、「地産地消」ということで地元の野菜を使った郷土料理を小学生に教える取組を行ったが、その取組は平成 24 年の現在でも、豊橋の公共施設「こども未来館ココニコ」での「大学生コックさんのクッキング教室」として継続実施しており、知識に基づいて実践するよい機会であり、本科で調理を専攻する学生の職業的自立にも貢献している。</p> <p>平成 22～23 年度・大学生の就業力育成支援事業では、「持続型職業人 SOZO プロジェクト」という取組で、「早期離職防止を目指したメンタルタフネスとスキルの育成」をテーマとして活動した。年2回「メンタルタフネス育成講座」を実施し、学生はメンタルタフネスの基礎</p>	

知識とモチベーション・コントロールの手法を学んだ。大学で学んだ知識を実践の場で活用する試みとして、ゼミの時間を活用して「プロジェクト活動」を実施した。2年間の試行錯誤期間を経て、これらの取組は、平成24年度も、より充実したものにするべく継続実施している。

上記3つの取組の具体的成果は、活動報告書として冊子にまとめてある。

**・これまでの取組の成果を、どのようにカリキュラム・ポリシーに反映させてきたか**

上記のような取組を踏まえ、平成22年度に3つのポリシー（アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー）を整備した。本科の教育目標に基づいてディプロマポリシーをまず書き、これまで受け入れている学生の現状を加味してアドミッションポリシーを作成した。その後、その2つの差分を埋めるにはどうしたらよいかという視点からカリキュラムポリシーを書き、3つのポリシーの整合性をとった。これらのポリシーは「教育方針」として大学のホームページで公開し、オープンキャンパスでも高校生に説明している。カリキュラムポリシー冒頭に掲げている本科の教育目標は、具体的に6つの項目（社会人基礎力、職業人意識、マナー、教養、知的能力、専門知識）に項目化し、それぞれの能力分野をどの科目群で対応するのか明示している。「キャリアプランニングⅠ・Ⅱ」の授業内容には柔軟性を持たせ、高校から短大への円滑な接続を目的とする初年次教育としても機能させている。知的基盤としての「教養」は、生涯教育の出発点としても重要だと考え、学生が自由に選択できる「基礎教養ユニット」として配置している。これまでの先入観で科目を選ばないように指導しており、未知の分野と出会える機会になることを期待している。専門的な知識と実務能力を体系的に学べるようにいくつかの「専門ユニット」を設置し、学生に選択させている。学生の履修状況に応じて、各「専門ユニット」内の科目を増減したり、受講生の集まらない「専門ユニット」は廃止したり他のユニットに統合したりしている。正課外で実施していた就職支援活動の一部は、より一層の成果をあげるため、必修の正課授業に取り込むようにしている。「特別研究セミナー」は、これまで学んできた知識を、具体的な課題にあてはめて考える力を身につけるために設置している。

個々の科目については、毎年、科目名称は同じでも内容や教え方を見直したり、学生の要望・時代の要請に応じて入れ替えを行っている。1つの具体例を挙げれば、平成24年度から「ライフ・コーディネート」という科目を増設している。この科目では「お金」の面からライフプランニングを学び、幸せな人生を送るための知識を提供している。現在の学生には、税金、健康保険、年金、貯蓄、ローン、相続といった実際的な知識が欠如しており、そのことが将来の自立に大きく影響すると考えるからである。

このように、カリキュラムは固定したものを単調に繰り返しているわけではなく、教員のFD活動の成果を反映させたり、いろいろな取組の反省にもとづいて見直しを続けている。

**○本事業において実施を計画している内容について**

**・短大における人材育成の現状と産業界のニーズとのギャップについて**

短大における人材育成の現状と産業界のニーズとのギャップについて議論する際、よく指摘される点のひとつに「学生の主体性の欠如」がある。これは、短大生が入社してから、与えられた仕事をするだけで満足してしまい、どうしても周囲からの指示を待つ状態になりがちであり、これまでの仕事のやり方の改善に取り組むとか、現状のやり方の問題点を自ら発見し、抜本的な解決方法を工夫するといった積極的な姿勢が欠けているという指摘である。厳しい経営環境の中、企業は社員の少数精鋭化を進め、社内で人材育成をする余裕を失い即戦力となる人材を求めているが、新入社員の中には上司から与えられた仕事しかやらない人材も見受けられるようである。心配りができ、よく気がついて物事を先取りして対応しておいたり、全体の仕事の流れを俯瞰して自分のやるべきことを率先してやる、といった姿勢が実社会から求められているのである。一方、学生の立場から見れば、決して学生の能力が欠如しているわけではなく、たまたまこれまでの人生経験において、自ら課題を見出し、

それを解決するような機会を与えられてこなかったせいだと言うこともできる。大学全入時代においては、高校教育と大学教育の円滑な接続のために、各大学の学生支援がますます手厚くなる反面、学生が自ら行動を起こし主体的に活動する機会や、先入観にとらわれず物事を解決していく経験が減少してしまっているのではないかと懸念される。そのため、本科においては、学生の主体性を引き出し、産業界のニーズに応えるために、産業界ニーズ事業：東海Aチームにおける取組みにおいて「アクティブラーニングを活用した教育力強化と検証」の具体的展開を他大学と連携を取りながら以下の4つの事業を計画し実行する。

※「持続型職業人SOZOプロジェクト」事業について

「就業力育成支援事業」である「持続型職業人SOZOプロジェクト」は、継続事業として平成24年度も実施していくが、今回、過去2年間の取組を発展・充実させ、「就業力」育成のより一層の充実を図るため、アクティブラーニングの手法を活用し、新たに事業展開する。

### ① 長期に亘る就職活動に耐え抜く「メンタルタフネス育成講座」の実施

今回は、年2回の「メンタルタフネス育成講座」を実施する。1回目は、「ストレス」の基礎理論、2回目は「セルフモチベーション」講座である。知識を伝達する座学に加え、課題演習の機会を多く設け、学生が主体的に学習する場とする。アクティブラーニングの手法のうち、5～6人のグループに分けて実施する「グループワーク」や、グループ内での「ディスカッション」を積極的に取り入れ、学生にやる気を出させる工夫をする。各グループでまとめられた意見は、全員の前で「プレゼンテーション」させる。ステップごとに、「振り返り」シートを書かせ、学んだ内容の確認をさせる。メンタルストレスをコントロールし、リラックスするためのノウハウは、これから一生活用できるものであることを理解させる。

### ② 度胸をつけ、臨機応変に対応できるための採用面接担当者の擬似体験（ロールプレイ）

就職試験では、最終的には面接試験での言動・振る舞いが採用かどうかを決めることになる。このプログラムは、学生に面接を受ける学生の立場と、企業側の面接担当者の立場の両者を体験させるものである。特に、通常は経験することのない「面接担当者」の立場を体験させることによって、企業側の人事担当者がどのような視点から学生を評価しているのか、わからせることが主眼である。学生に企業側のニーズを理解させ、自己理解を深め、自らの職業観を形成させるのに役立つのである。具体的には、まず学生に志望企業に対する志望動機や入社後のそうありたい姿を事前に考えさせた上で、自分を積極的に売り込む模擬面接を実施する。面接担当者はキャリアセンターの職員や、社会人経験のある教員によって行い、実際の面接試験に近い形で実施する。学生は教職員からのフィードバックにより、志望業界、志望企業や志望職種に対する理解を深めることができる。次に、模擬面接が終了した学生は、今度は面接する側として面接担当者側に着席し、他の学生の面接の様子を観察したり、面接担当者の1人として質問したりする。学生は、この経験により、他学生の良い点や改善点を自分の場合に照らし合わせて学んでいくことになる。最後にグループごとに学んだ内容を「ディスカッション」させて、「グループワーク」の成果として、各グループに「プレゼンテーション」させた後、教員が総括し、学生に「振り返り」を促す。

### ③ 地域組織と連携したプロジェクト活動

地域組織・企業と関わりを持ちながら、企画・計画・実行するプロジェクトを立ち上げ、そのプロジェクトの運営を通して、学生自らが主体的に学ぶ「SOZOプロジェクト」を推進する。これまで学んできた知識が、実社会でどのように活用されているのか知る機会となる。学内だけの閉じた活動ではなく、学外へ出かけて行く何らかの「フィールドワーク」を含んだ活動である。実際のプロジェクトでは、いわゆるPDCAサイクルを回しながら物事を進め改善していく「プロジェクトマネジメント」の手法を経験する。プロジェクト全体を「タスク」に切り分け、段取りよく物事を進める手法を学ぶ。前もってリスク要因をリストアップしておくといったプロジェクト成功のノウハウを身につけていく。プロジェクトによっては、企業人のものの考え方、企業での仕事の進め方を垣間見ることになる。このプロジェクトマネジメントの知識は、パーソナル・プロジェクトマネジメントとして物事を進める視点を学生が持つことになり、将来ずっと使えるスキルであることを教える。

パソコンを活用した正課授業のリテラシー教育に加え、各学生に1台ずつ貸与した携帯情報端末（iPad）を活用し、就業後にも活かせるスキルを育成する。

プロジェクト活動では、教員の側は学生の主体性を引き出す「ファシリテーション能力」を問われることになり、教員の教育力育成にも役立つ。

#### ④ アクティブラーニングの手法を使った教育経験の共有

「社会人基礎力」といったジェネリックスキルの育成は、初年次教育をどう進めるかといった問題とともに、どこの大学でも試行錯誤している課題である。各大学でのFD活動を活性化し、連携大学間で共有する仕組みをつくりたい。あらゆる局面で、アクティブラーニングの手法として5つ要素（グループワーク、ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り）を含むような活動を展開し、上記の活動の高度化を図っていく。連携大学間のFD活動合同報告会といった研究会において、各大学の教員・学生代表がプレゼンテーションを行い、お互いの評価・フィードバックを行いながら、各大学の教育力のレベルアップを図りたい。これらの成果は、ホームページで公開し、連携していない大学にも広めるようにしたい。

上記のように、アクティブラーニングの手法を最大限活用して、メンタルタフネス育成講座やプロジェクト活動を中心とした4つの事業を展開し、学生の主体性を育み、産業界のニーズと大学における人材育成のギャップを埋めるような活動としたい。

#### ・支援期間終了後の運用について

支援期間終了後も、連携大学間や協力企業との関係を維持発展させ、アクティブラーニングの手法を使いこなす経験を蓄積し、お互いに水平展開するようにし、他地域へもホームページや活動報告書による情報公開を積極的にすすめる。本事業を通して教職員のFD活動・SD活動を活発にし、学生の大学生活をより充実したものにする努力を続けることは当然のことである。

# 事業グループ活動報告







3.1

4つの教育事業



### 3. 事業グループ活動報告

#### 3. 1 4つの教育事業

##### これまでの経緯

平成 22 年度に文部科学省の「大学生の就業力育成支援事業」の採択を得て、本学では「持続型職業人 SOZO プロジェクト」という取組を始めた。その取組は、「メンタルタフネスの育成」、「プロジェクトの実践」、「ユビキタスキャンパスの実現」、「大学コミュニティを活用した社会人基礎教育の展開」といった活動から構成されており、平成 23 年度には精力的に活動した。残念ながら事業仕分けの影響を受けて文部科学省の補助事業は中断されたが、平成 24 年度に入ってから本学は独自の「持続型職業人 SOZO プロジェクト」活動を継続実施していた。

平成 24 年度秋に、文部科学省の新たな「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」（以下、産業界ニーズ補助事業と略称する）の採択を受けたので、他大学との連携活動を中心軸に据えて、既に継続実施していた事業を見直し、すべての事業内容を深化・発展させている。

平成 22 年度から開始している事業で今回の補助金対象とならないものも、その意義は変わったわけではないので本学独自予算で継続実施している。

補助金対象の「産業界ニーズ補助事業」部分の取組は、核となる 4 つのグループで構成してあるが、それらが相互の関連を深めながら相乗効果を上げるように努力している。平成 24 年度は 3 カ年計画の初年度であり、また活動期間が短かったために期待通りの成果を上げることができた部分がある一方、いろいろな課題も明らかになった。平成 25 年度は、他大学との連携活動も活発になり前年度の取組をより充実させる形で進めた。平成 26 年度は補助事業の完成年度であり、3 年間を通した成果も振り返っている。

以下、4 つの教育事業のそれぞれについて互いの関連性を念頭におきながら、取組内容、平成 26 年度の活動成果、3 年間を通した成果、今後の活動への課題の順で記述していく。

#### (1) 長期にわたる就職活動に耐え抜くための「メンタルタフネス講座」の実施

##### 1. 取組内容

短大での就職活動は、就職ガイダンスが始まる 1 年生の 10 月から 2 年生になって内定が得られるまでの長丁場となっている。その間に、学生は就職試験や面接で挫折を経験することで意欲が低下したり、内定先に就職した場合でも比較的早期に離職してしまうという残念な場合を見てきた。そのような現状に対応するために、この講座を実施することにした。

新 1 年生に対してメンタルタフネス育成のために、入学直後の 4 月中に「メンタルタフネス・ベーシック講座」、夏期休暇開始の 7 月下旬に「メンタルタフネス・セルフモチベーション講座」を実施する。ベーシック講座では、ストレスの基礎理論、気分転換をうまくはかるリラクセス法、などを教えている。モチベーション講座では、モチベーションの基礎理論・コントロール法を教えている。学生時代にいろいろなものに食欲にチャレンジして人生のいろいろな面を見ておく生き方が、将来ストレス解消の気分転換にも役立つ機会を与えてくれることをアドバイスしている。

「ストレスコントロール力」は、経済産業省が提唱する、いわゆる「社会人基礎力」の要素としても採り上げられており、いろいろな活動を継続して行う際の基盤となる力である。

## 2. 活動成果（平成 26 年度）

例年、入学直後の4月中に実施していたが5月の連休前ということもあり欠席する学生が見られた。そのため、今年度は5月に実施した。この講座は外部講師によるものだが、教員も参加して、正課外の授業で学生の興味をどう引っ張っていくのか大いに参考にしている。この取組はアクティブラーニング強化の一環として、グループワーク主体で進めており、学生がお互いを知るよい機会ともなり、参加学生の高い満足度を得ることができた。アンケート調査によると講座の満足度は5（非常に満足）～1（非常に不満足）の5段階評価で平均値は、ベーシック講座が4.0程度、セルフモチベーション講座が4.4程度である。

グループごとに討議したり、グループの意見を皆の前で発表したり、振り返りの場面を何度も設定してあり、大学におけるスタディスキルを身につけるための、いわゆる「初年次教育」としても機能している。この講座の実施により、以前よりも通常授業や正課外行事に欠席する学生が減少するという嬉しい効果も得られた。

### 《主な行事と活動成果》

#### （1）メンタルタフネス・ベーシック講座

開催日：平成26年5月31日（土）2・3限

会場：豊橋創造大学短期大学部 A23 教室

参加人数：キャリアプランニング科1年生 49名

講師：キャラメルソース（株）代表取締役 初見 康行 様

内 容：

1. ストレスコントロールを学ぶ重要性とメリット
2. ストレスの基本的な知識の習得
3. 自分自身のストレスの原因を知る
4. ストレスへの対処法

成 果：

- ・新1年生で、まだお互いに十分打ち解けてはいない段階で、お互いをよりよく知る機会となった。
- ・グループ内で、自ら積極的に話す機会を設け、活発にディスカッションさせたこと。
- ・「振り返り」タイムを適宜設け、よりよく理解できるように配慮したこと。
- ・ランチを大学側で提供し、楽しく和気あいあいと会食できていること。
- ・簡単なリラクセス法を教えたこと。

反 省：

- ・いろいろな行事が終了した5月に設定したが、参加が77%程度にとどまったのは残念だった。



図3. 1 メンタルタフネス・ベーシック講座の様子

(2) メンタルタフネス・セルフモチベーション講座

開催日：平成26年7月30日（水）1・2限

会場：豊橋創造大学短期大学部 E23 教室

参加人数：キャリアプランニング科1年生 30名

講師：キャラメルソース（株）代表取締役 初見 康行 様

内容：

1. モチベーションとは何か
2. モチベーションに関する基本的な知識の習得
3. モチベーションの代表的な理論
4. 自分自身のモチベーション「持論」の探究

成果：夏期休暇中の開催となり、参加が3分の1程度だったが、参加学生の満足度は高かった。

アンケート調査を実施したが、学生からは「モチベーションということ考えたことがなかったが今後の学生生活に生かしていきたい」、「これからは嫌だなあと思うこともモチベーションを上げてがんばろうと思った」、「自分のモチベーションを上げるのに必要なものがわかった」などの感想があった。

反省：外部講師の都合で、学生が参加しやすい日程を組めなかった。



図3. 2 メンタルタフネス・セルフモチベーション講座の様子

### 3. 3年間を通じた成果（平成 24, 25, 26 年度）

この講座は、時代の要請に合致した取組であると総括している。「ストレスコントロール力」は、「社会人基礎力」の1要素としても採り上げられており、社会生活において基盤となる力である。

そもそもこの講座を企画した背景は以下のようなことである。

キャリアプランニング科では、本科の学生に対する「産業界ニーズ」の把握のためにキャリアセンターの教職員が一般企業・病院・信用金庫等を訪問し、採用したい人材像について要望を尋ねている。

訪問記録を見ると、共通した感想が見い出せた。

- 新しいことにチャレンジする勇気・バイタリティがほしい。
- 積極的に声を出してほしい。
- 時間をかけても1人前にするつもりだから、厳しさについてきてほしい。
- 自己肯定感を持ち、プラス志向で、ものごとを考えてほしい。
- 仕事の上で壁にぶつかっても、その壁を乗り越えていってほしい。

そういった要望が出てくる状況に対応するために、メンタルストレスと対処法の基本を学ぶ「メンタルタフネス・ベーシック講座」と、やる気を引き出す「メンタルタフネス・セルフモチベーション講座」を始めたわけである。

### 4. 今後の課題

これからについてであるが、平成 27 年度からは、正課授業である1年次の「キャリアプランニング I」の中で実施する計画である。

ストレスコントロールは処世上のスキルであり、大学において就業前からの取組は先進的なものだと考えるが、あまりに力を入れ過ぎてもこの講座の存在自体が学生のストレスになる面もあることがわかっている。開講時期については遅らせて、就職試験で挫折を経験するようときに活用できるようにすればストレスコントロールのノウハウは余計に効果的かもしれないが、就職活動中には、まとまった時間が取れない状況である。

## (2) アクティブラーニングを活用した「自己理解促進講座」の実施

### 1. 取組内容

本事業は、全学総力をあげて、学生の「社会人基礎力・就業力」育成支援に臨むことが基本姿勢であり、この2番目の取組はキャリアセンター、科の教員、教務課の職員が協働して実施している。

学生をキャリアデザインに取り組ませる際、自己理解をどう深めさせていくかは大きな課題である。「自己理解」は、学生が志望会社を選び、志望動機を語り、入社後どんなことがしたいのか考え、自分の長所・短所を見つめることができるようになるためにはどうしても取り組まなければならない分野である。

一連の「就職ガイダンス」を実施する中で最終段階として面接訓練を行う機会があるが、アクティブラーニングの手法を用いて学生に自己理解を深める経験をさせている。チーム分けを行い、グループワークの形式で、テーマを与えてディスカッションさせ、チームごとにプレゼンテーションをさせている。

振り返りシートを用意して、ステップごとに自分の現状を認識させた。自分が採用担当者の役を演じるロールプレイでは、また違った視点から同級生の姿に自分を重ねて見ることにもなり、新鮮な経験だったようで、今後の実際の面接に臨むための準備としては有意義なものであった。

### 2. 活動成果（平成26年度）

例年、面接訓練のイメージとして人前で話す場面を思い浮かべ参加をいやがる学生が欠席することがあったが、「メンタルタフネス育成講座」と、段階を踏んだ懇切丁寧な就職ガイダンスの成果のためか、学生の多数が参加してくれた。思い切って参加したら参加したで、それなりに楽しむすべを身につけてきたようで、同じグループになった学生と新たな出会いを経験したり不安を共有したり、偶然与えられたチャンスを活用する力も学生本人が自覚しない内に着実についてきている。

「自己理解促進講座」の効果の把握については、ルーブリック評価指標を設定したアンケートを実施した。その評価結果をもとに、講座の内容自体とともに評価指標の改善を進めている。

この講座のあと、「女子学生のための就職フェア」、「東日合同企業セミナー」、「浜松地域企業セミナー」などの合同企業説明会への参加を促した。これらの企業セミナーでは、各ブースで入社数年の若手社員が自分の会社を熱く語っている場合がある。自分の会社はどんなことをしているのか、その会社で自分はどんな仕事をしているのか、どんな後輩を欲しいと考えているのか、会社の魅力や働くことの意義を先輩として語っている。面談に臨んでいる学生達は、傍で見ていると社会人の迫りに圧倒される一方で、自分の将来の姿を彼らに重ね、自分もそんな社会人になってみせるんだという思いでいるようにも見えてくる。生真面目にメモを一生懸命とっている学生達を見ていると、もっと型破りな学生がいてもいいような、ある意味欲張りな矛盾した気持ちも頭をよぎる。

この学生達には、その後、教職員が個別に就職試験前の面接訓練に対応している。

学生の自己理解を促進する手段として、客観的に学生自身の「社会人基礎力」を測定する検査の利用を考え、試みにリアセックの「PROG」の活用を始めた。



## 《主な行事と活動成果》

### (1) 自己理解促進講座

開催日：平成27年2月09日(月) 2~4限 自己理解促進講座 導入・基礎編  
：平成27年2月10日(火) 2~4限 自己理解促進講座 実践編

会場：豊橋創造大学短期大学部 A32 教室

参加人数：キャリアプランニング科1年生 58名

講師：(株)学研メディコン 宗村 義隆 様

内容：

1. 就職活動の全体像の理解
2. コミュニケーション能力の意義の理解
3. 面接の基礎知識の理解
4. 知識として学ぶ「面接担当者の視点」
5. コミュニケーション能力の向上
6. 自己診断テスト
7. 振り返り
8. 身だしなみ
9. メイク講座
10. マナー
11. 体験して学ぶ「面接担当者の視点」

成果：

- ・今後の就職試験の面接に臨むにあたって、自分なりの課題を見つけられている。
- ・他者を自分の写し鏡と見なし、自分を多少は客観視できるようになっている。



図3.3 自己理解促進講座の様子

### (2) 基礎力測定アセスメント「PROG」の受検 —入学時点での受検—

開催日：平成26年3月26日(水)

会場：豊橋創造大学短期大学部 A22 教室

参加人数：キャリアプランニング科への入学予定者 73名

内容：(株)リアセックの「PROG」のコンピテンシーテスト実施

※入学前ガイダンスの中で実施している。

(3) PROG 受検結果解説会 ―これからの2年間でどのように過ごすのか―

開催日：平成26年4月18日（金）

会場：豊橋創造大学短期大学部 A32 教室

参加人数：キャリアプランニング科1年生 73名

講師：(株)リアセック 松谷 育代様

内容：「PROGの強化書」を用いて、3月26日の受検結果の見方・活用方法を解説した。

成果：

3月26日の入学前ガイダンスの際に受検したPROG(コンピテンシーテストのみ)の結果が届き、検査結果をこれからの2年間の短大生活にどう活かすのか説明した。学生が卒業後の自分の姿を描き、充実した社会人生活を送るために、学生時代をどう過ごしたらよいのか考える時間とした。自分の「強み」を自覚し、それをどう伸ばしたらよいのか、学生は真摯に課題に取り組んだ。

「あなたの強みは何ですか？ どのような学習・経験を通じて、その強みはついてきたのですか？」

「あなたの弱みは何ですか？ どうすれば、その弱みを克服できると考えますか？」

という問い掛けにうまく答えられるようになれば、将来、職業についてときにも強みを発揮できる可能性が高いということができ、そういう理由から、面接でも問われることが多いのだというアドバイスをを行った。

(4) 基礎力測定アセスメント「PROG」の受検 ―卒業前時点での受検―

開催日：平成27年1月9日（金）

会場：豊橋創造大学短期大学部 A23 教室

参加人数：キャリアプランニング科2年生 55名

内容：(株)リアセックの「PROG」のコンピテンシーテスト実施



図3.4 「PROG」受検の様子

### 3. 3年間を通じた成果（平成24, 25, 26年度）

自己理解促進講座は、すっかり定着した行事になっている。学生達の就職活動に対して、大きな成果を上げてきている。この講座の存在意義は明確であり、今後も継続していく。毎年入れ替わる多様な学生達に対して、教職員の側は臨機応変に対応できるようにティーチングスキルを向上する努力を続けている。

#### 4. 今後の課題

自己理解促進講座の第1日目は、基礎的な知識をつけさせるためにどうしても座学が多くなりがちで退屈に感じている学生がいる。第2日目に実施している模擬面接は、いざ実際に自分達がやってみると予想以上に楽しいようで積極的に参加してくれた。第1日目だけ出席して、こんなものかと判断して第2日目を欠席してしまう学生に、うまく2日間全体の仕組みを教え参加を促すようにしたいものである。このごろの傾向として、何事につけ、やってみる前からどういうメリットがあるのか損得勘定をする学生がおり、うまく対応する必要がある。

いろいろな教育活動に対して成果評価を行っているが、学内の成果評価は、一般的には、どれだけ成長したのか教育活動前後の相対的な育成度合を調べるものである。それに対して、PROGによる外部評価は、社会人として有しているべき態度・志向・スキルの絶対評価である。それぞれに特長があるので、両者を併用してうまく活用していくようにしたい。

### (3) 地域組織と連携した「プロジェクト活動」

#### 1. 取組内容

「特別研究セミナー」という科目を使い正課外の活動を含め、PBL と称されるプロジェクト活動を実施した。プロジェクト活動は、学内教育を就業へつなぐ重要な教育手法だと捉えており、実践活動を通して、社会を知り、自分を知り、課題解決力を養い、自らの不足する能力に気づき、キャリアについて考え、学びを今後も継続する大切さを実感させる場にしたいという構想のもとに始めた取組である。

大学内の活動にとどまることなく地域社会と連携した活動を展開するという前提で活動した。

この取組は学生たちに地域社会・企業との関わりを持つ場を用意し、プロジェクト運営を通じて、学生自らが主体的に学ぶ機会とするものである。テーマは教員の指導の下、学生達が決めるわけだが、平成 26 年度は 7 つの多様なプロジェクトを実施することができた。

今回の取組では、伸ばすべき資質については、経済産業省の「社会人基礎力」の 12 の要素の中から「主体性」「計画力」「傾聴力」「ストレスコントロール力」の 4 つを評価の中心に据えて、達成度評価を実施することにした。プロジェクト活動は学生にとって自由度の大きい活動であり、どの分野の力が伸びるのか一概に予測できないが、これら 4 つの分野の力の成長度合いは比較的測定しやすいと考えたからである。「社会人基礎力」の 12 の要素を 4 つに絞り込んだ形になってはいるが、それぞれの力を広がりのあるものと捉えているので、積極的に評価対象としなかった残りの 8 つの分野の力も、ある程度は同時に伸びてくるものだと想定している。経験値として、個々の要素を独立して育成できるというわけでもなく、プロジェクト活動がうまく回りだすと、複数の分野の力が連鎖して相乗効果で伸びていくことがわかっているからである。

「主体性」は、当事者意識、やる気といった言葉でも表わされるもので物事に取り組む姿勢である。

「計画力」を採り上げることにより、物事を進める上でプロセスを大切に作る姿勢を強調した。学生はとかく結果ばかりを見てしまい、それまでの途中の段階を考え実行するプロセスにより自分を鍛えるということをしたがらない。プロセスを楽しむ余裕があれば自ずと次の段階が見えてくるということも教えるように努めた。

「傾聴力」については、ただ単に相手の話に耳を傾けるということではなく、相手の話を冷静に捉え、自分の考え方を自分の言葉で返して、アイデアのキャッチボールをすることが当然考慮されている。

「傾聴力」は、「発信力」につながる能力である。

「ストレスコントロール力」については、1 番目の「メンタルタフネス育成講座」で採り上げており、プロジェクト活動を通して、その講座を実施した意義について身に染みて感じてもらえたはずである。

#### 2. 活動成果（平成 26 年度）

「プロジェクト活動」の効果の把握についても、ルーブリック評価指標を設定しアンケートを実施したが、定量的な測定が困難なことを実感させられている。この取組を統括している教員の側から見て、プロジェクト活動の実態としては、それほど違いがない場合でも、自己評価が高いチームと低いチームに分かれてしまう。アンケート結果をもとに、今後も評価指標の改善を進めていく

い。

数値的な評価とは別に、「プロジェクト活動の経験がこれまでの学校生活の中で一番楽しかった」といった学生の感想のひとつで、現場の教員はいろいろな努力が報われた感じがし、次のプロジェクトへのやりがいとなっているのもまた事実である。

教員が、プロジェクト活動の成果として観察していることは以下のようにまとめられる。

- ・連携先の社会人の熱い思いを聞いたり、協力を求められることは、学生の動機付けに役立っていること。他者の思いに共感し、何かをしたいという気持ちが起きているわけである。
- ・地域・会社との連携といった対外活動には、責任が伴うことを学生が学んでいること。
- ・取り組んだテーマに対して、問題意識が高まったこと。
- ・親しくない学生同士でも、目的・意義が明確な活動ならば、対話が始まり協働できること。
- ・プロジェクト活動では、それぞれの学生の「居場所」が存在すること。寡黙な学生は何も考えていないわけではなく、不測の事態が生じた時などには、はっきり自分の意見を主張し、打開策を提案してくれることがあること。
- ・熱心に活動した学生は、達成感を味わっていること。
- ・プロジェクト活動は、学生の成長とともに、教員の指導力向上にも役立っていること。

#### ●4つの力への対応・評価

##### (1) 主体性

プロジェクト活動を始める計画段階では、教員の関与が必要である。プロジェクトが動き出せば、学生は主体的・積極的に参加するようになる。教員が一方的に学生を意識付けることは困難で、学生が興味を持ち目的意識が高くなるまでは、主体性は発動しない。

##### (2) 計画力

節目となる大きなイベントを用意すると、しっかりとした計画を立てるようになる。

学生が計画力をどう考えるべきか指導する必要がある。外部と連携して行うプロジェクトでは、どうしてもスケジュールより遅れがちで、進捗状況や不測の事態に対して臨機応変に計画変更する必要があるが、そういったことを計画力がなかったと過小評価してしまう学生がいる。

計画を立てる場合、経験値が低い状態では精度が低いものとなるのは当然で、経験を積ませることで計画力を育成していくことは可能である。

##### (3) 傾聴力

学外の人達と対応することで、傾聴する力はある。相手の言うことを理解しようという姿勢が大切である。相手の話でもポイントを捉えて、聞くことができるようになっている。

人間は、納得しないことに対しては自ら活動しようとはしない。学生同士、しっかりと意見交換した上で活動している様子が伺えた。

##### (4) メンタルコントロール力

グループワークで、メンバーに辛抱強さが育成されていく。

プロジェクト活動には不測の事態はつきもので、そのような状況でも自分達の決めたことをやり抜こうということで、メンタルな力はある。

不本意ながら参加した学生が、結局は良い経験ができたという満足感を得ている状況を見ると、先入観を持たないで実行してみる必要性を意識付けることができた面はある。

## 《実施した主な行事と活動成果》

### (1) プロジェクト活動のキックオフ

開催日：平成26年4月16日（水） 第1限

会場：豊橋創造大学短期大学部 A23 教室

参加：キャリアプランニング科2年生

内容：プロジェクト管理アプリの説明、プロジェクト活動について

概略：学生にiPadを持参させ、「プロジェクト管理システム」と、本学独自の総合学修ポートフォリオである「Sozo Passport」の説明を行った。プロジェクト活動のキックオフミーティングということで、社会人基礎力の内容、プロジェクト活動を行う意義、プロジェクトの進め方、タスクの考え方、などについても説明した。また、科の方針として、学生が授業に積極的に参加する「アクティブラーニング」の取組を推進することや、それに伴い各自で「ポートフォリオ」の形で学修成果を蓄積し、有意義な1年間を過ごすように助言した。



図3. 5 キックオフ講演会の様子

「キックオフ説明会」後のプロジェクト活動の進行は以下の通りである。取りかかっているのが早いチームでは、4月から活動を始めている。プロジェクト活動のテーマ選定に時間がかかる場合があることを考慮し、「プロジェクト実行計画書」の提出期限を遅めの6月下旬に設定してある。そのまま12月の成果発表会まで途中の経過報告をしないというのも円滑に実行されていかないことにもなりかねないので、春学期が終わった時点で「プロジェクト中間報告書」を提出して、これまでの活動を振り返り、今後の活動予定を見直す機会としている。

6月20日（金）	プロジェクト実行計画書提出期限
8月08日（金）	プロジェクト中間報告書提出期限
12月12日（金）	プロジェクト成果報告書（学生）提出期限
12月17日（水）	発表用パワーポイント資料提出期限

## (2) プロジェクト活動 成果発表会

開催日：平成26年12月19日（金） 第1限

会場：豊橋創造大学短期大学部 A21 教室

参加人数：キャリアプランニング科2年生 67名 来賓、教職員

内容：各プロジェクトチームによる活動成果発表、質疑応答  
学生アンケートの実施



図3. 6 成果発表会の様子

プロジェクト成果発表会実施後、各教員は、成果発表会での発表の様子、学生アンケート結果、アクティブラーニングとしての取組への反省を踏まえて「プロジェクト成果報告書（教員）」を書いた。

本成果報告書の補助資料として添付されている。

- |          |                       |
|----------|-----------------------|
| 1月23日（金） | プロジェクト成果報告書（教員）提出期限   |
| 1月23日（金） | プロジェクト活動・広報用原稿提出期限    |
| 1月23日（金） | 平成26年度「成果報告書」1次原稿提出期限 |

### 3. 3年間を通じた成果（平成24, 25, 26年度）

3年間に実施したプロジェクトテーマは以下の通りである。

平成24年度 8プロジェクト

- ・食の伝達「大学生コックさんのクッキング教室（こどもクッキング）」プロジェクト
- ・豊橋の朝市を考えるプロジェクト
- ・発酵食品のおいしさ発見プロジェクト
- ・防犯プロジェクト
- ・身近な自然発見・発信プロジェクト2012
- ・長谷川ゼミ活動報告
- ・豊橋うどんプロジェクト
- ・We ♥ ROSE プロジェクト

#### 平成 25 年度 7プロジェクト

- ・食の伝達「大学生コックさんのクッキング教室（こどもクッキング）」プロジェクト
- ・女子力を活かした路面電車の企画提案
- ・豊橋の特産品「うずら」をキーワードにしてプロジェクト活動を展開する
- ・お茶入門プロジェクト
- ・防犯プロジェクト
- ・秋葉道・木の駅プロジェクトへの企画・調査協力
- ・We ♥ ROSE プロジェクト ーバラ生産農家と提携した青いバラの製作と販売

#### 平成 26 年度 7プロジェクト 7プロジェクト

- ・食の伝達「大学生コックさんのクッキング教室（こどもクッキング）」プロジェクト
- ・女子力を活かした路面電車の企画提案
- ・駄菓子の世界を調べる
- ・「体験型 和食」プロジェクト
- ・防犯ボランティア
- ・医療機関の掲示物の適正化
- ・We ♥ ROSE プロジェクト

これらすべてのプロジェクト概要は、本学ホームページで公開されている。

#### 4. 今後の課題

プロジェクト活動は、毎年、取組テーマが変わったり、構成メンバーの個性が変わったり、連携先の事情があったりで教員の側にも臨機応変な対応が求められ、期待通りの成果が上がらないことがある。平成 27 年度以降も継続して実施する予定をしており、より積極的に教員間でアクティブラーニングの手法を共有する機会を持つ予定である。

プロジェクト活動は学生の動機づけに工夫を要する取組で、毎年、多かれ少なかれ以下のような課題に直面している。

- ・テーマ選定について、学生関与の度合いをどうするのか。

プロジェクトテーマについては、教員が複数年度に渡り計画済みの場合がある。その一方、学生にプロジェクトテーマを決めさせる場合もあるが、すんなりとは決まらない。教員は、その間待つことができなくて、教員がテーマを提案することにもなる。プロジェクトテーマと、個々の学生のモチベーションの接点が希薄な場合、学生のやる気を持続させることは困難である。

プロジェクト活動から学ぶ点が少なくなると、単なる作業になってしまうきらいがある。

- ・教員は、着地点が見えているテーマを繰り返すようになりがちである。

教員でさえ先が見えないテーマの場合、教員にも臨機応変な対応が求められ、かなりの時間を割いて学生といっしょに考える必要が出てくる。

未知の活動の場合、想定した成果が得られないというリスクを伴う。プロジェクト活動は、学生メンバーの意気込み・団結度合い、取り上げたテーマの「筋」の良し悪し、連携先の協力度合いな



どによって教員のスキルに関係なく、成果が左右されてしまうことがある。ただし、「産業界ニーズ補助事業」では連携大学との学習会を通して「失敗学」を学び、その考え方を活動に活かすことにしており、外形的に成功したように取り繕うことよりも、学生がプロジェクト活動から何を学んだかに重点を置いている。

- ・特定の学生だけが活躍するようになる。発言する学生が限られる。

学生のチームワーク力形成にどれだけ教員が関与できるものなのか、限界がある。物静かな学生に目を向けて、他人に対して自分の意見をはっきり言えるようにできるものなのか。

発表会におけるプレゼンテーションでは、スライドに用意してある内容については雄弁に発表できるが、質疑応答の際、活動の意義や掘り下げた内容の質問をされると手も足も出ない場合がある。

- ・活動時間を確保するのが大変である。

正課の授業時間は問題ないが、正課外で外部組織と連携活動しようとする、連携先の都合もあり、学生達の時間割と相談し活動時間を捻出することが大変である。対外活動をさせる場合、参加させるための動機づけに工夫を要する。

- ・プロジェクトの完成度をより高めようというこだわりが欠ける。

概して、最低限のことをして済ます傾向がある。経験不足のため、先を見通す力が弱い。

まわりのことに配慮するまでの余裕を持ってない。

割り当てられたタスクをこなしたあと、さらにできることを探してまでやろうとはしない。

- ・プロジェクト活動を単年度で終了するのか、次年度へつなげるのか。

意義あるプロジェクト活動ほど、連携先からは次年度も続けて欲しいという要望がある。継続プロジェクト活動は、企画・計画の部分が出来上がっている、次年度取り組む学生は、ゼロから立ち上げる場合に比べ、アイデアを出す局面は減ることになりがちである。

## (4)「アクティブラーニング」の手法を使った教育経験の共有

### 1. 取組内容

「社会人基礎力」に代表される広範囲な汎用能力を培う手段として、アクティブラーニング（能動参加型授業）が話題になっている。平成 24 年 8 月に中央教育審議会が、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」を取りまとめ、学生の受動的な教育から、学生の能動的学修へ切り替えることを提言しているからである。教員と学生とが意見交換しながら、学生同士は互いに切磋琢磨し刺激を与えながら人間的に成長していく課題解決型の授業で、知性を鍛える双方向の教育へ転換することが強く求められている。

アクティブラーニングの場を考えると、学外の組織と連携するやり方と、学内でまずできることをやるやり方とが考えられる。

産業界との連携という「インターンシップの活用」がすぐにも頭に浮かび、本学でもかなり前から実施してきているが、相手の都合もあることであり、事務系の分野では、その内容を深化させることに困難さを感じてきた。

今回の学内活動を中心とした取組では、アクティブラーニングの具体的手法として5つ（グループワーク、ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り）を取り上げ、教育現場のあらゆる機会にそれらの手法を活用して、学生の社会人基礎力を伸ばすようにした。

「ファシリテーター」という言葉があるが、学生を具体的活動に巻き込んでいくだけの動機づけができる教員の育成が課題である。学生がどのように成長するか、どれだけ成長するかは、もちろん学生次第の面が大きいことは事実であるが、教員の側としても、自身の成長を含め、アクティブラーニングの取組を重要視すべきことは明らかである。挑戦すべき目標、その目標を達成するための具体的プロセス、その目標を実現させようとする情熱があれば学生は成長していく。この基本姿勢を念頭に平成 24 年度から教育手法の改善に取り組んできた。科の定員割れの状況も、教員の取組を後押しした。

### 2. 活動成果（平成 26 年度）

4つの教育事業の1つとして「アクティブラーニング」を項目立てし強調してあるわけだが、他の教育事業でもアクティブラーニングを積極的に取り入れている。上述してあるように、1番目の「メンタルタフネス講座」や2番目の「自己理解促進講座」ではグループワークを中心に進めている。3番目の「地域組織と連携したプロジェクト活動」は、PBL と呼ばれるアクティブラーニングそのものである。

平成 25 年度秋学期からは、一般授業にもアクティブラーニングの手法を取り入れる試みを始めた。

アクティブラーニングを積極的に取り入れる取組を始めたわけだが、当初から、その活動成果をどう評価したらよいか検討課題に挙げられていた。補助事業の最終年度である平成 26 年度は、12月に総括ができるように活動した。

## 《主な行事と活動成果》

### (1) 科内での勉強会

キャリアプランニング科独自の勉強会は、以下の通り実施した。

- 5月21日(水) 科会での勉強会 (1) 失敗マンダラについて、連携会議の報告
- 6月18日(水) 科会での勉強会 (2) 失敗マンダラの理解を深める
- 7月16日(水) 科会での勉強会 (3) ルーブリック評価について
- 9月17日(水) 科会での勉強会 (4) 連携活動の失敗事例集について
- 12月17日(水) 科会での勉強会 (5) アクティブラーニングについての総括(反省会)

### (2) 外部講習会の活用

学外講習会へ伊藤圭一講師を派遣し、講習会参加の成果を科の教員で共有した。この講習会は、アクティブラーニングについて、アクティブラーニングの手法を取り入れた体験を通じて学ぶものである。

- 8月30日(土) 能動的学修の教員研修リーダー講座(第1回)
- 9月27日(土) 能動的学修の教員研修リーダー講座(第2回)
- 10月25日(土) 能動的学修の教員研修リーダー講座(第3回)

場所：アルカディア市ヶ谷

参加：30名(大学10名、短大20名)、他に講師・コーディネーター5名

主催：一般財団法人 全国大学実務教育協会

内容：毎回、課題が出され、それに基づいた演習を通じて、能動型学修・体験型学修において、振り返り・定着・リフレクションが持つ重要性を実感できるようになっている。

伊藤圭一講師は、講習会の成果を踏まえ、公開授業を行った。

12月03日(水) 2限 「数学基礎」

12月11日(木) 3限 「数的処理」

平成27年度には、より進んだ内容の応用講座が計画されており、継続して参加予定である。

### (3) 学内での研修会

第1回 教育力向上研修会

日時：8月06日(水) 14:50~16:30

会場：豊橋創造大学短期大学部 E34 教室

内容：「アクティブラーニングにおける失敗とその対策」

※「第1回教育力向上研修会」は、連携副幹事校・名古屋商科大学の亀倉正彦に基調講演をお願いしてからワークショップを実施したので、連携事業の項で詳しく報告してある。



図3. 7 第1回教育力向上研修会の様子

## 第2回 教育力向上研修会

日時：2月20日（金）14：50～17：00

会場：豊橋創造大学短期大学部 A24 教室

テーマ：「企業が求める社会人基礎力と指導の在り方」

内容：講演とワークショップ



図3. 8 第2回教育力向上研修会の様子

### 3. 3年間を通じた成果（平成24, 25, 26年度）

大学が多様な学生を受け入れるようになり、教員の教育力が問われるようになってきている。

産業界ニーズ補助事業の最終年度にあたり、アクティブラーニングについて科の教員で総括を行った。いくつかの所見を列挙する。

- ・授業の目的を明確にすれば、学生の主体性は高まる。
- ・学修成果を確認するには、感想を書かせたり発表させたりするのがよい。
- ・授業内容によっては、フィールドワークを取り入れることも効果的である。
- ・多様な学生を対象とする場合、チームワークで効果を上げることは可能である。
- ・学生同士の助け合い（相互学習）を助長することは、学生の活動性を高めるのに役立つ。

- ・大教室で大人数の学生を対象とした場合、グループ学習はさせにくい。
- ・振り返りシートを書かせることは、学習効果が大きい。
- ・振り返りは、単なる復習にとどまらず、その内容を深める必要がある。
- ・今回の取組を通して、常にアクティブラーニングという視点を念頭に置くようになった。
- ・折に触れ、小テストなどで理解度を確認することは有効である。
- ・自ら意見を言う学生を作り出すことにチャレンジしたい。

#### 4. 今後の課題

大学評価で、産業界のニーズに対応した教育内容・教育力が常に問われるようになってきている。「教員が何を教えているのか」から、実際に「学生が何をできるようになったか」という視点が重要視されている。

産業界ニーズとして企業が「コミュニケーション能力」という言葉で象徴的に表しているものは、ビジネス文書作成、討論、発表などのスキルに加え、論理的思考力、説得力、発信力、傾聴力、柔軟性、臨機応変な対応、状況判断力も含めた総合的な力を指しているのであり、実社会が求めているのは、そのような能力を備えた人材なのである。このような多様な能力を育成してほしいという要求に対応するため、カリキュラムマップを作成し、授業科目と育成資質との対応を明らかにしつつあるがなかなか実効性あるものにはなっていない。科目同士が連携し合い、学生の新たな学びが既存の知識と結び付けられ、深い学びを引き起こし、理解を深め、知識が構造化され新たな全体像を結ぶといったレベルまでには前途多難という現状である。

アクティブラーニングも、その言葉自体の広がりとともに、内容自体の深化も求められている。「課題発見・解決能力」を身につけさせる必要性は痛いほどわかっているつもりである。

能動的学修は、学生がやる気になるだけでうまく機能するものではない。双方向の授業を実現するためには、参加するための事前学習、授業への参加、参加後の学習といった「学修時間の大幅な増加・継続的な確保」が不可欠であることに対する認識が教員、学生、いずれの側にも十分でない。

忘れないためにも、評価方法について、今後も続く課題を列挙しておく。

- ・「社会人基礎力」の12の力をどう評価するのか。
- ・PROGの結果をどう活用するのか。
- ・教員間の評価軸のずれをどう改善し、評価精度をあげるのか。
- ・短期的な学習効果の測定と、長期的な人間的成長の評価をどう使い分けるのか。

#### ●4つの教育事業をアクティブラーニングという視点でまとめる

以上、本学の4つの取組について書いてきたが、繰り返し強調しているように共通軸は学生の主体性を引き出すアクティブラーニングである。

学修成果を上げるための課題自体は、明確である。

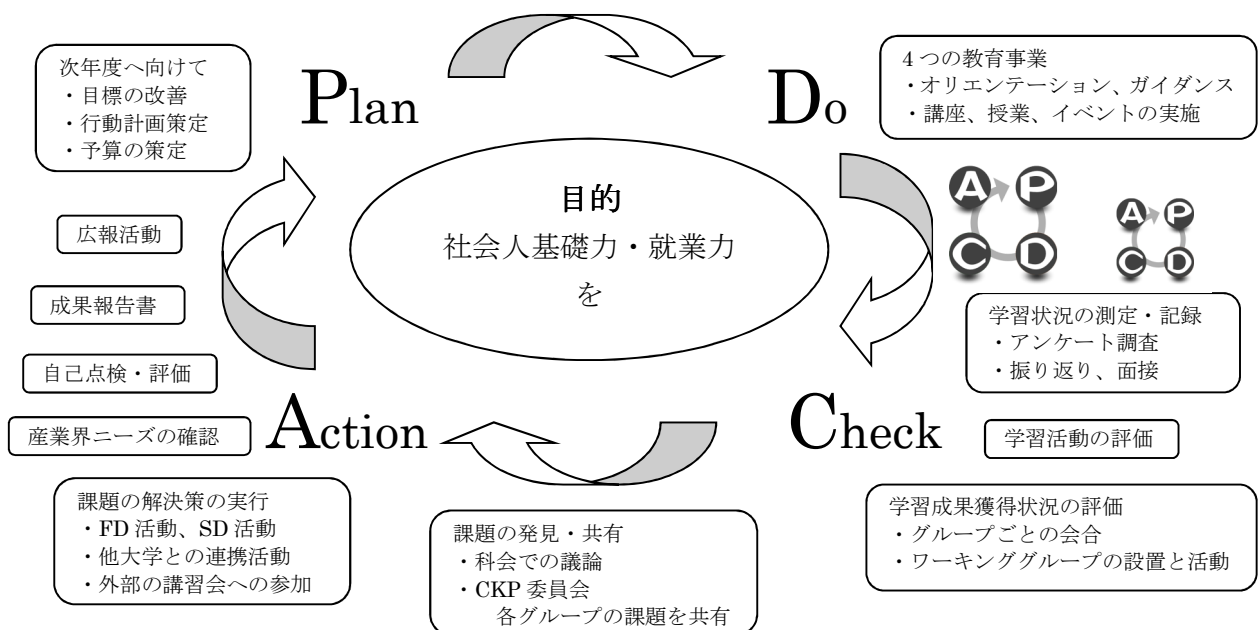
- (1) 地域社会・産業界との連携・協働の推進、問題意識を共有する大学同士の連携強化
- (2) 教育課程の科目同士の連携
- (3) 教職員の連携強化
- (4) アクティブラーニングを連携して担う教職員を育成するためのFD活動・SD活動の促進
- (5) 教育方法の効果、学修成果の達成度の把握

こうして並べてみると、「連携」や「協働」、「評価」がキーワードであり、大学全体が教育システムとして対応すべきことがよくわかる。

短期大学部では、機関全体としての自己点検・評価活動が機能しているのは当然のことだが、このCKP活動にもPDCAサイクルを回す形で自己点検・評価活動は行われている。

7つのグループの課題は、毎月開催のCKP委員会で報告事項・協議事項として提出され、メンバーで議論し共有されている。4つの教育事業は、キャリアプランニング科内で深く議論されている。

### キャリアプランニング科のCKP活動



上記の図は、1年間を通して見たときのPDCAサイクルだが、各グループ活動ごとに、あるいはもっと小さなタスクごとにPDCAサイクルは、いくつも日常的に回転している。

他大学との連携会議・シンポジウムで得られた知見は課題解決に活用され、その結果は連携大学へも報告している。

PDCAサイクルを回しながら、常に念頭に置いていることは次の3点である。

- (1) 学生に成功体験、達成感を味わわせたい。
- (2) 学生に個性を磨く経験をさせたい。
- (3) 学生に、ちょっぴり背伸びをさせるような経験をさせたい。



3.2

教育体制・産業界ニーズ  
把握体制の整備・連携推進





### 3. 2 教育体制・産業界ニーズ把握体制の整備と連携事業の反映

#### (1) 教育体制・産業界ニーズ把握体制の整備

##### ●教育体制の整備

教育体制整備については、全学組織をあげての「科のあり方検討委員会」を立ち上げ、カリキュラムの大枠から詳細な開講科目に至るまで詳細に検討した。

3つのポリシーを明確に示すために、建学の精神・教育理念、教育の目的・目標、学修成果、教育課程・教育プログラムの相互の関係を見直した。その際、カリキュラムマップを整備した。

カリキュラム検討の際には、地元の有力企業・組織を訪問し、本学の卒業生に対するニーズについてヒアリングを実施し、その結果を新カリキュラムに反映させるようにした。

その結果に基づき、平成26年度から新カリキュラムを始動させている。また、平成26年度には、3つのポリシーに加え、アセスメントポリシーを検討した。

産業ニーズを把握するやり方は次項に詳述するが、例年5月以降に、本学卒業生を採用してくれた企業をキャリアセンター教職員が訪問し、卒業生の状況を聞くようにしている。この訪問結果を、本学の教育体制を通じて、学生の社会人基礎力養成に活かす仕組みを強化しつつある。

##### ●産業界ニーズ把握体制の整備

本科の教育改革の参考とするため、毎年、地元の企業・金融機関・病院等を訪問し、卒業生に対するニーズ調査を実施している。実社会から本学の教育改革に向けての示唆は、一言に集約すれば、学生の「人間としての魅力」をどう磨くかということであった。産業界が求めるものは、コミュニケーション能力や、物事に取り組む姿勢、やる気、我慢強さなど、まさに「社会人基礎力」に代表される資質であることを確認できた。

世間に公表されているどのアンケート結果でも、産業界が求める能力は、「コミュニケーション能力」が圧倒的にトップである。連携幹事校の三重大学の「育成すべき資質」に関するアンケート結果でも、企業の要求が強い割には教員の意識にのぼっていない資質として、「行動力」と「コミュニケーション能力」が挙げられていた。

コミュニケーション能力というと、討論や発表、文章作成などのスキルを問題にしているように思われがちだが、そのような狭い分野だけの力を問題にしているわけではないと思われる。論理的な思考無しには、討論や発表で相手を説得できるものではないからである。何よりコミュニケーションは双方向である。相手に自分の考えをわかりやすく伝える発信力や説得力も重要だが、いま話題になっている、相手の意見を丁寧に聴く傾聴力や、意見や立場の違いを受け入れる柔軟性や臨機応変な対応ができなければ他者との円滑なコミュニケーションは成立しない。会社組織のような集団で行動していくには、自分と周囲との状況を把握する状況把握力も必要となる。

大学へのニーズとしては、一般論として、高校生・保護者は「大学に学歴と資格取得支援、その結果としての就職」を求め、大学教員は「やせ細っていく教養教育と細分化される専門教育」で対応し、産業界は「社会人基礎力で象徴的に表されるような人間的成長」を求めている。

産業界ニーズについては、ある程度把握できているわけだが、卒業生の就業状況を知るために今後も継続して企業訪問を実施することになっている。

## (2) 連携事業を反映した体制整備

### 1. 取組内容

連携 23 大学、とりわけ東海 A（教育力）チームでの連携を密に推進し、連携活動で得られた知見を上記の体制整備に活かしている。具体的には、東海 A（教育力）チーム会議での情報交換が基本であり、それに加え、チームに属する各大学がシンポジウムを開催したり、年に 1 回の割りで中部圏産学連携会議を持ち議論を深めている。問題意識が共通しているので、連携事業から学ぶことは多い。

### 2. 活動成果（平成 26 年度）

平成 26 年度に実施した他大学との連携活動は、以下の通りである。「社会人基礎力」育成が共通課題であり、教育力改革を進めるために、指導方法、その評価方法、評価を活かす改善方法について意見交換できていることは大いに意義あることである。

#### 《主な行事と活動成果》

教員が連携事業に参加したり、本学が主催した行事を時系列で列挙する。教職員が参加した研修会も含めてある。

5 月 17 日（土）午前 東海 A（教育力）チーム会議

会場：三重大学 総合研究棟Ⅱ 1 階 メディアホール

内容：定例チーム会議 チーム成果物について、失敗マンダラの検討

※成果概要：東海 A チームの 3 年間に渡る活動成果の集大成として、小冊子を発行することになった。発行時期は、11 月の中部圏産学連携会議を目標とした。連携 23 大学から収集したアクティブラーニング失敗事例を、失敗原因ごとに分類し「失敗マンダラ」としてまとめる議論を始めた。今後の情報交換はネット上で行い、8 月の連携 FD 合宿研修で成果物としてまとめ上げる段取りとした。

5 月 17 日（土）午後 東海 A（教育力）チーム 連携 FD ワークショップ

「産学アクティブラーニングの発展に向けて」

会場：三重大学 総合研究棟Ⅱ 1 階 メディアホール

内容：ワークショップ 「産学アクティブラーニングの発展に向けて」

※成果概要：東海 A チームのメンバー校が 4 つの班に分かれ、失敗事例について議論し、共有した。「失敗マンダラ」から失敗事例・失敗原因を 1 つ選び、その対策や改善案を提案し、班ごとに発表した。

6 月 28 日（土）午後 IT+教育 最前線 2014 セミナー

会場：ウインクあいち

内容：教育現場での IT ツール活用事例報告

※成果概要：他大学の教員が IT ツールを教育現場に活用している事例発表を聴講した。iPad を利用した教育サービスの向上事例は参考になった。

8月06日(水) 本学主催 第1回 教育力向上研修会

会場：豊橋創造大学短期大学部 E34 教室

内容：「アクティブラーニングにおける失敗とその対策」

※成果概要：東海 A チーム副幹事校である名古屋商科大学経営学部の亀倉正彦教授による基調講演「PBLにおける社会人基礎力の育成と指導～地域・産業界との連携へのチャレンジの軌跡～」に続き、「プロジェクト活動を通しての社会人基礎力育成と指導方法の検討」をテーマにワークショップを開催した。プロジェクト活動において、連携企業から求められる成果をある程度確保しながら学生の社会人基礎力を育成していくには、どのような指導方法が有効か議論した。

8月09日(水) 同志社大学 シンポジウム 2014

会場：同志社大学 今出川キャンパス 明德館 1 番教室

内容：社会・地域・産学連携の最前線を問う

ー連携教育としての PBL の可能性と課題ー

※成果概要：他大学の取組事例を見て本学の今後の活動に対する示唆を与えられてきた。学生が地域活動をすることにより主体性と達成感が生まれ、また、大学生という存在自体も地域社会から見直されている事例が印象的だった。学生のプロジェクト活動が、地域の人々を結びつける契機になっている場合もあり、参考になった。

8月28/ (木) 東海 A (教育力) チーム 連携 FD 合宿研修

～ 8月29日(金) 会場：金山プラザホテル (愛知県名古屋市中区)

内容：教育力チームの知識化成果物の仕上げ、事業終了後の活動について

基調講演：安永悟先生

「活動性を高める授業づくりを実現する上での諸困難とその克服」

※成果概要：1 日目は、各大学がまとめた知識化成果物 (失敗事例) について議論し内容を深めた。2 日目は、安永先生の講演を聞いた後で、自由に議論した。ただ単にグループワークをさせればアクティブラーニングになっているわけではなく、グループ活動により学生の活動性が高まっていなければアクティブラーニングは機能していないという議論は印象的なものだった。

9月05日(金) 平成 26 年度 教育改革 ICT 戦略大会

会場：アルカディア市ヶ谷 (東京、私学会館)

内容：伊藤圭一講師 課題提出システムを利用した教養教育と教養試験  
対策

※成果概要：本学は、e ラーニングを積極的に推進している。パソコンや iPad を活用した事例を紹介した。

9月24日(水)

中部大学特別セミナー2014

会場：中部大学 2111 講義室、5511 講義室

内容：第3回産業界ニーズ事業 特別セミナー

ー企業経営者から見たリスク管理ー

※成果概要：東海 A チームのメンバー校のセミナーに参加し、学生の参加率の高さに驚いた。正課外のシンポジウムに学生を参加させるためにポイント制を導入していることは参考になった。

11月15日(土)

平成26年度 中部圏産学連携会議

会場：名古屋国際会議場 2号館、レセプションホール

内容：公開ポスターセッション

中部圏産学連携会議

基調報告、パネルディスカッション

※成果概要：本事業の集大成となる産学連携会議だった。

11月19日(水) 午後

「産学協同就業力育成シンポジウム2014」

未来を創る「主体的な学び」を実践する

～Future Skills Project 研究会 4年間の挑戦～

会場：明治大学アカデミーコモン内アカデミーホール

内容：パネルディスカッション、研究報告、成果報告、情報交換

※成果概要：FSP研究会の4年間の活動成果を聞くことができた。「まず主体性、それから学びへ」という方法論を実践する活動で、参加学生は初年次に社会の厳しさを理解し、大学で学問をすることの必要性を実感する契機になっている。本学がこの研究会から学んだことは、学びの原動力として「主体性」が持つ、大学教育の死活にかかわる重要性である。「主体性」があってはじめて、自ら学ぼうという意欲が湧き、他者と協力する姿勢ができ、社会で必要とされる学問を学びたくなり、さらには大学でしか学べないこと存在にも気づき、学ぶ手法を身につけていくということである。こういった大学での学びが大きな自信につながり、実社会に出てからも自分の力を自分で磨き続けるようになり、いろいろな人達とも協力しながら活躍できるようになる。FSP 講座の特徴は、「学生に失敗させることにより、自分に何が足りないか、卒業までに何を身に付ければよいか、1年生前期の時点で気づかせる」ことにあり、東海 A チームが「失敗」を活かすことに着目してきた取組との共通性を理解できた。

12月18日(木)

東海 A (教育力) チーム会議

会場：名古屋商科大学大学院 伏見キャンパス E22 教室

内容：産業界ニーズ事業終了後のつながりについて

※成果概要：平成24年度から3年間続けてきた産業界ニーズ事業も平成26年度で終了する。今度、連携校同士でどのように情報交換していくのかを議論した。

3月07日(土)

「大学教育改革フォーラム in 東海 2015」

会場：名古屋大学東山キャンパス IB 電子情報館、ES 総合館

内容：基調講演 秦 敬治氏「大学教育改革を進めるために必要なものとは」

ポスターセッションとオーラルセッション

3月12日(木)

東海 A (教育力) チーム会議

会場：名古屋商科大学大学院 伏見キャンパス E22 教室

内容：「本事業終了後のつながり」について

### 3. 3年間を通じた成果(平成 24, 25, 26 年度)

どの大学においても、専門的内容に拘らなければ教育手法において教員が直面している課題は共通である。それに、今回は社会人基礎力育成が共通課題になっている。

企業人が日本の大学生に不足を感じている点を理解できた。以下は、その一部の列挙である。

- ・自ら考え、多様な他者と協同して議論を深めていく、わかりやすい言葉で外部に発信していくという点で力不足である。
- ・チャレンジ精神、多様性の活用、主体的行動力、リーダーシップといったマインドや能力は、大学だけでは育成機会に限りがあり、産学連携を通して積み上げていく必要がある。
- ・とことん考え抜く訓練ができていない。
- ・修羅場を経験することで、大学での学び方を学ぶ必要がある。

教員が、大学生に不足を感じている点の代表例は、以下の1点につきる。

- ・言われたことには素直に従うが、自ら新しい何かを作り出そうとする力が弱い。

### 4. 今後の課題

平成 26 年度は、本事業の完成年度だった。東海 A (教育力) チームとしてアクティブラーニングを評価するための共通指標・効果測定をどうするのか議論を進めてきた。それについては結論が出たわけではない。

取組を始めた平成 24 年度は、連携のための手法として「失敗学」を活かすことが前面に出ていたが、「失敗」という言葉自体の印象の悪さのためか、平成 25 年度は、本来の意図が広く理解されないまま「チャレンジすべき課題」という無難な言葉に後退することになった。

3 年間の成果物としては、「アクティブラーニング失敗事例ハンドブック」という冊子を発行することができ、当初の問題意識を担うタイトルにできた。

本学は、まずは「失敗」してみるという意義を大いに認め、それをどう活かすかに拘り、失敗のプロセス全体を紹介する事例については、今後も広く学外へ公開する覚悟である。



# 3.3

## 教育体制・産業界ニーズ把握 体制の後方支援





## (1) ユビキタスキャンパスグループ

### 1. グループ事業の取り組み

本グループ事業では、教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援を目的として、ICT 環境の整備および ICT 利活用推進を中心とした以下の活動を行っている。

- (1) 学内 ICT 環境の整備・充実（設備等の維持や利便性向上の検討）
- (2) 携帯情報端末の配布・諸説明等の ICT リテラシ指導、および、e ラーニング推進
- (3) 「4 つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援
- (4) 事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

前年度までの実施状況と評価結果を踏まえ、平成 26 年度は改善活動を中心に実施した。特に、スチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) の追加開発・改修の支援、本事業 Web サイトの改修と充実化、等に取り組んだ。事業最終年度に当たるため、教員によるこれまでの ICT システム活用状況を把握することを目的としたアンケートを実施した。

また、例年どおり、平成 26 年度入学生 (学部・経営学科 1 年、短大部：キャリアプランニング科 1 年) に iPad を貸与するとともに、利用に関するサポートを行った。

#### <<主なスケジュール>>

分類	時期	内容
(1)	4 月～3 月	学内 ICT 環境の維持・管理・監視、充実化、状況に応じて改善活動
(2)	4 月	プロジェクト管理システム・スチューデントプロフィールシステム等利用方説明 (情ビ 3 年、キャリア 2 年)
	5 月	携帯情報端末の配布準備
	6 月	携帯情報端末の配布、利用方法に関する説明会 (経営 1 年、キャリア 1 年)
	12 月～2 月	携帯情報端末の物品確認および回収 【確認】 12 月:情ビ・経営 3 年・キャリア 1 年、1 月:経営 1 年、情ビ・経営 2 年 【返却】 1 月:キャリア 2 年、2 月:情ビ 4 年
(3)	4 月～3 月	プロジェクト管理システム開発・運用支援
	4 月～3 月	スチューデントプロフィールシステム運用・開発支援
	4 月～3 月	e ラーニングシステム管理
(4)	4 月～3 月	Web サイトの運営

情ビ:情報ビジネス学部キャリアデザイン学科 経営:経営学部経営学科 キャリ:短期大学部キャリアプランニング科

#### <<主な行事>>

分類	日付	内容	対象
(2)	4 月 8 日 (火)	プロジェクト管理システム利用説明会	経営 3 年
	4 月 10 日 (木)		
(2)	4 月 16 日 (水)	プロジェクト管理システム利用説明会	キャリア 2 年
(2)	6 月 11 日 (水)	iPad 配布・説明会 (+ Handbook, Sozo Passport 説明)	経営 1 年
(2)	6 月 13 日 (金)	iPad 配布・説明会 (+ Handbook, Sozo Passport 説明)	キャリア 1 年
	8 月 6 日 (水)	ICT システム利用状況に関するアンケート	教員
(3)	8 月 20 日 (水)	プロジェクト管理システム機能改善	
(3)	4 月～2 月	スチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) 機能改善	
(3)	8 月～10 月	e ラーニングシステム (Handbook) 更新	

## 2. 活動成果（平成 26 年度）

### (1) 学内 ICT 環境の整備・充実(設備等の維持や利便性向上の検討)

- 平成 23 年度末に無線 LAN 環境の充実化をはじめとする学内 ICT 環境の更新を行い、大学の一般教室・PC 教室のすべてにおいて携帯情報端末から無線 LAN 接続ができる環境を整えている。平成 24 年度以降は、継続して学内設備に対するシステムログ等の観察を通じて不具合発生状況を監視した。結果として、今年度は特に不具合の発生は確認されず、現状では安定した無線 LAN 接続環境を提供できているといえる。

### (2) 携帯情報端末の配布・諸説明等の ICT リテラシ指導、および、e ラーニング推進

- 平成 26 年度入学生(経営学科1年生、キャリアプランニング科 1 年生)に対して携帯情報端末 (iPad)を貸与するとともに、その基本操作方法や ICT システム(スチューデントプロフィールシステム Sozo Passport、e ラーニングシステム Handbook)の導入に関する説明会を実施した(図 3.9)。



図 3. 9 iPad 配布・説明会の様子（左：経営 1 年、右：キャリア 1 年）

- 平成 25 年度に引き続き、平成 26 年度も e ラーニングシステム(Handbook)の授業や演習における活用が進んだ。図 3.10 は Handbook ログイン数(日ごとのユニーク利用ユーザー数の月合計)およびコンテンツ数を示したものである。年度によって学生数が異なるためログイン数を単純に比較することはできないが、年間を通して e ラーニングシステムが活用されたといえる。教職員が作成した教育用コンテンツも確実に増加しており、授業・演習内利用が一層進んだことを確認できる。

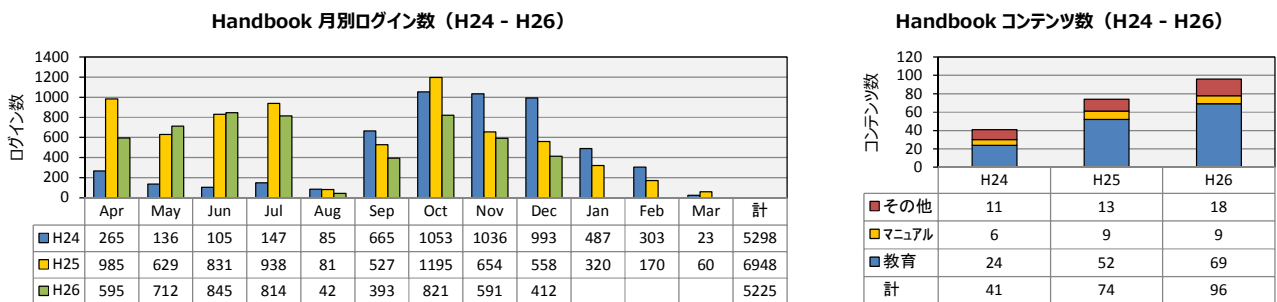


図 3. 10 e ラーニングシステム (Handbook) 活用状況  
(左：ログイン数の推移、右：揭示コンテンツの内訳)

### (3) 「4 つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援

- 事業開始当初から自己理解促進プログラムグループ・地域産業連携プロジェクトグループと連携して開発してきたスチューデントプロフィールシステム(学修ポートフォリオシステム、Sozo Passport、図 3.11)について、平成 26 年度も開発・運用支援を行った。具体的には、PROG アセスメント結果の登録、社会人基礎力評価シートの登録、自己理解促進プログラムにおける面接記録ビデオの登録、インターンシップ情報の登録(報告書等)を行った。Sozo Passport の主要機能である「課題作成(教

員)」「課題提出(学生)」の年間利用状況を整理したところ、学部・短大あわせて 13 科目(課題数 48)で同機能を使用して授業活用されたことがわかった。

- 地域産業連携プロジェクトグループで利用する『プロジェクト管理システム』について、プロジェクト情報登録やアカウント作成等の管理面で支援を行った。また、システムの利便性を向上させるための若干のインターフェース改修作業を行った。



図 3. 11 スチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) 画面例 (左: 学生のレポート提出ボックスと学修記録タイムライン、右: 教員による課題確認画面)

(4) 事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

- 本事業に関する対外的な広報、および、内部関係者向けのマニュアル揭示等の目的で設置した Web サイトについて、コンテンツ掲載等をはじめとする管理・運営を行った(図 3.12)。平成 26 年度については、計 73 件の本事業に関する記事を発信することができた(H24:60 件、H25:119 件)。
- サイトへの Web アクセス解析結果を図 3.13 および表 3.1 に示す。この結果から、年間を通して本事業サイトが参照されており、大学関係者のみならず、広く本学の取り組み(活動内容や教育手法等)を産業界・教育界に周知するひとつのツールとして効果的であったといえる。実際に、事業グループサイト(三重大学)や教育(就業力)関連の情報を整理しているポータルサイトから本事業の記事がリンクされ、そのサイトを經由した一定数のアクセスがあったことも確認された。



図 3. 12 地域産業連携教育力改革プロジェクト Web サイト <http://project.sozo.ac.jp/>

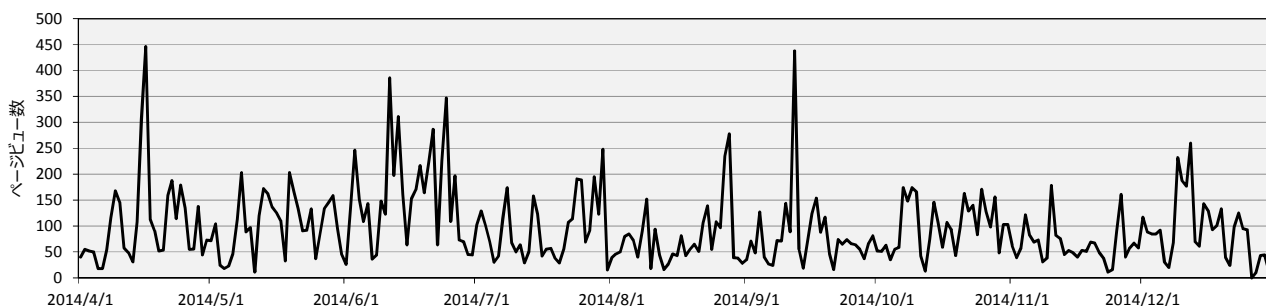


図 3. 1 3 事業 Web サイトのページビュー数の推移  
約 97 ページビュー／日 (2014/4/1～2014/12/31)

表 3. 1 事業 Web サイトアクセス状況

年度	ユーザー数	訪問数	ページビュー数	訪問別 ページビュー
H24 (2012/4/1 - 2013/3/31)	2,706	9,059	19,894	2.20
H25 (2013/4/1 - 2014/3/31)	4,141	12,676	34,553	2.73
<b>H26</b> (2014/4/1 - 2014/12/31)	<b>5,154</b>	<b>10,280</b>	<b>26,543</b>	<b>2.58</b>

その他

- 事業最終年度に当たるため、教員によるこれまでの ICT システム活用状況を把握することを目的としたアンケートを実施した。(結果については 3 年間を通じた成果の中で説明)

### 3. 3 年間を通じた成果

本グループ事業では、教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援を目的として、ICT 環境の整備および ICT 利活用推進を中心とした活動を行ってきた。3 年間の活動成果のうち、主要な事項について以下にまとめる。

#### (1) 学内 ICT 環境の整備・充実(設備等の維持や利便性向上の検討)

- 携帯情報端末の管理環境の整備  
学生自身が iPad を管理できるよう、学内 PC 環境を整備した。D 棟 4 階・5 階、および、サポートセンターの PC を利用して、iPad のバックアップ等を行えるようにした。また、学生のアクティブな活動に支障を与えないよう、iPad を充電できる専用ロッカーも配置してサポートした。
- 無線 LAN 環境の充実  
平成 23 年度末に無線 LAN 環境の充実化をはじめとする学内 ICT 環境の更新を行い、大学の一般教室・PC 教室のすべてにおいて携帯情報端末から無線 LAN 接続ができる環境を整えた。平成 24 年度以降、本事業期間中は、学内設備に対するシステムログ等の観察を通じて不具合発生状況を監視した。結果として、学生の活動に影響を与えるような大きな不具合の発生は確認されず、安定した無線 LAN 接続環境を提供できたといえる。
- ネットワーク(対外接続)環境の改善  
iPad の配布により、学内ネットワークのクライアント数が倍増する結果となった。増加する学内からのインターネットトラフィックに適切に対応するため、本学情報システム部門(ネットワーク管理委員会、システム管理室)を中心に、インターネット接続回線の増速(最低保証帯域の改善)等の対応を行った。

3 年間の活動を通じて、学生・教職員における iPad 利用のための環境整備・充実化を実現できたといえる。

(2) 携帯情報端末の配布・諸説明等の ICT リテラシ指導、および、e ラーニング推進

- 毎年、新入学生に対して入学後(6月)に iPad を貸与し、基本的な操作や管理方法に関する説明を行ってきた。同時に、スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport) および e ラーニングアプリ(Handbook) の導入と利用に関する説明も行った。これまでの活動を通じて、本事業に係る学部・学科の全学生に iPad を貸与する(所持させる)ことができた。
- 在学生全員が iPad を所持することにより、授業内で iPad や e ラーニングシステムを活用しやすい環境を構築できた。当初は教員による授業活用があまり進まなかったものの、操作法の習熟が進むにつれ、平成 26 年度には多数の教員が授業・演習で活用するようになった。また、コンテンツの蓄積や充実が進んだ。
- 就業力育成支援を目的としたプッシュ型の問題配信システムおよびアプリ(一問一答アプリ、Sozo Platz) の開発を行い、実際に学生に使用させた(図 3.14)。開発したシステムとアプリに関しては学会発表(平成 24 年度電気関係学会東海支部連合大会)を行い、外部の教育者から一定の評価を得ることができた。

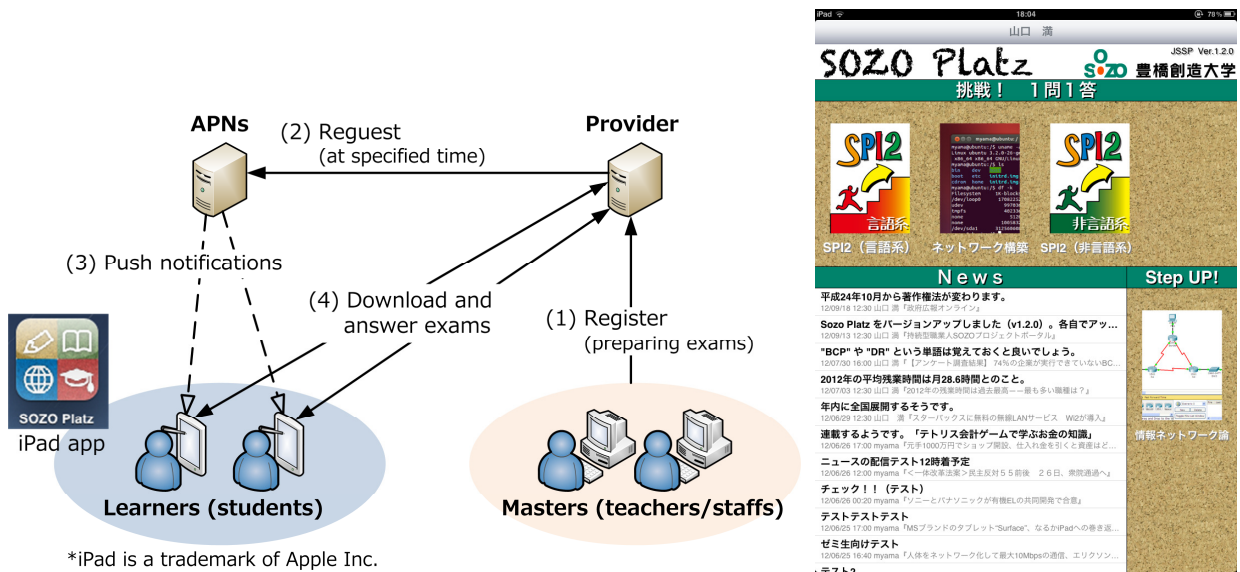


図 3. 1 4 就業力育成のためのプッシュ型問題配信アプリ Sozo Platz (右: アプリ画面)

3 年間の活動を通じて、学生に対しては最新の ICT デバイスとそれを利用した学習環境を提供することができた。教員に対しては、ICT システムを利活用した「新しい教育手法」や「授業改善」などを検討する機会を提供することができた。

(3) 「4 つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援

- 自己理解促進プログラムグループ・地域産業連携プロジェクトグループと連携して、本学独自の学修ポートフォリオシステム(スチューデントプロフィールシステム) Sozo Passport を開発し、実際に活用した。本システムは、ポートフォリオシステムとして、PROG アセスメント結果、社会人基礎力評価シート、面接記録ビデオ、インターンシップ情報などを蓄積し、Web を通じて容易に確認することができるものである。また、学生の学修成果(課題レポート)を蓄積・参照することを可能とし、学生が自分の学修履歴を振り返られるようにしている。本システムについては、利用している教員からは比較的良好な評価を得ている。学生に対して「課題の提出場所」という認識を周知させることができ、頻繁にポートフォリオシステムにアクセスさせることに成功している。
- 地域産業連携プロジェクトグループで利用する『プロジェクト管理システム』について、開発(改修)および運用支援を行った。当初はアプリ(iOS)の形で利用していたものを、環境に依存しない形(Web ベース)に修正した(図 3.15)。プロジェクトによっては本システムを利用せずに運営していたところも存在したが、プロジェクト活動の支援という機能を果たすことができたと考えている。



図3. 15 プロジェクト管理システム (Web) (左 : トップ、右 : 議事録管理画面)

3年間の活動を通じて、システム開発・運用面から他事業グループの活動・運営支援という目的は達成できたといえる。Sozo Passportについてはまだその機能を十分に活かしておらず、言い換えれば今後の可能性を大いに期待できる仕組みであるため、事業終了後も継続して一層の有益な活用法を検討する。

#### (4) 事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

- 本事業は、中部圏 23 大学と連携し、教育方法や産業ニーズ把握方法についての情報共有を図ることを目的としている。これに対し、本学の活動状況を逐次対外的に示して共有するため、独自に Web サイトの構築を行った。Web サイトの構築にあたっては、事業グループごとに記事を参照したり、プロジェクトごとに活動を参照したり、等、閲覧者にとって利用しやすいように CMS を活用して整備した。

3年間の活動を通じて、前出の図 3.13 および表 3.1 から明らかとなり、本サイトにより学内関係者のみならず学外の人にも情報を提供することができ、目的を果たしたと評価できる。

＊ 『ICT システム利用状況に関するアンケート』 集計結果

学内 ICT システム・サービスに関して、現状を把握し、より一層の機能向上や改善を図るとともに、今後の運営方針決定の参考とするため、教員対象のアンケートを行った（実施日：平成 26 年 8 月 6 日（水）、回答数 20）。集計結果の抜粋を図 3.16 に示す。

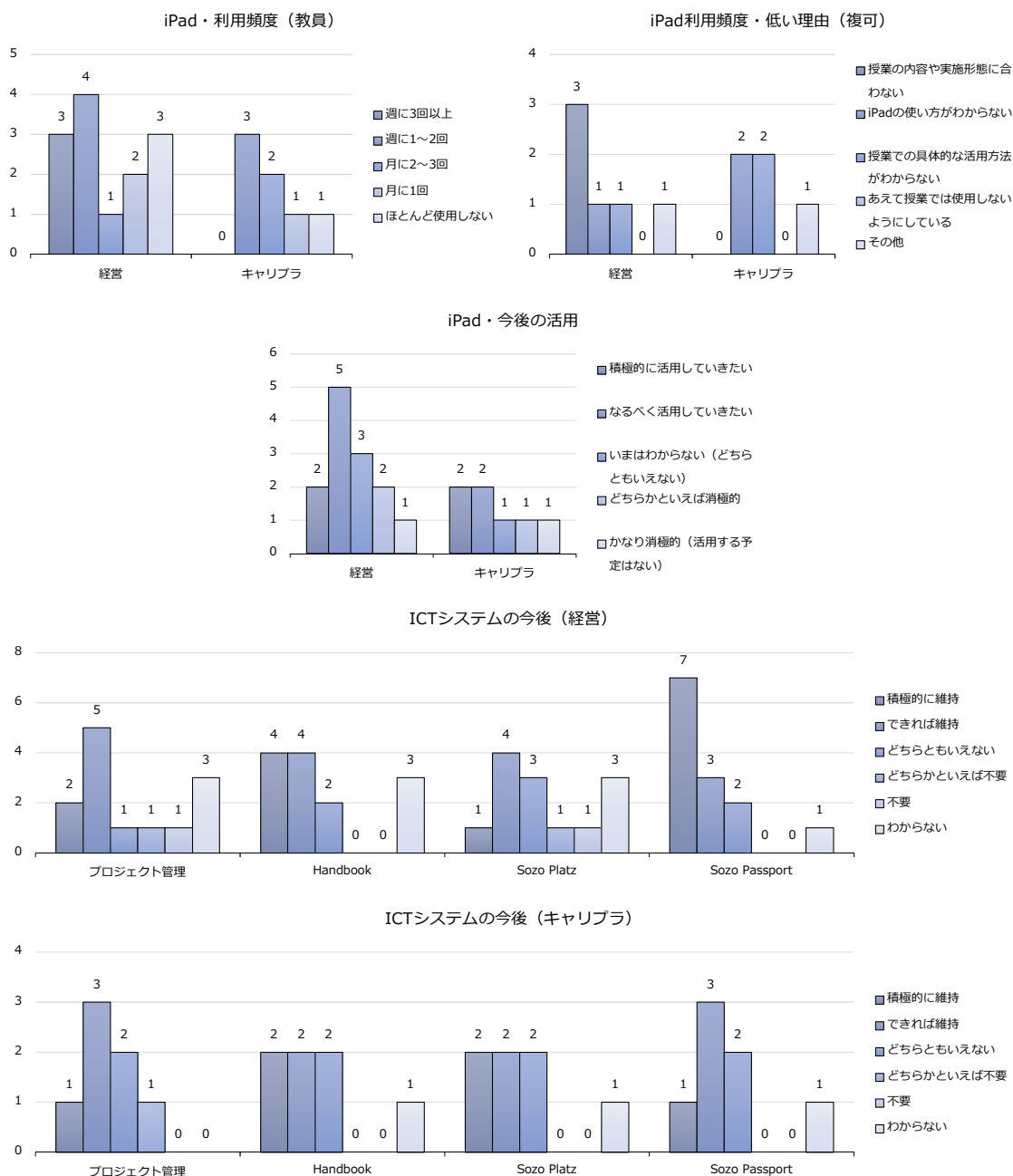


図 3. 1 6 『ICT システム利用状況に関するアンケート』 結果 （一部抜粋）

アンケート結果から、次の点が今後の検討課題として挙げられる。

- iPad を活用したいという意思をもつ教員が多いが、具体的な活用方法を見出せない状況で悩んでいる様子が見えてくる。教員間での連携(授業での活用など、先行して試行している教員からの助言、意見交換など)が重要であり、そのための取り組みが必要である。
- ICT システムの有益性について多数の教員に理解されている様子であるため、今後も利用者に優しいシステムの構築に取り組むとともに、活用事例を蓄積・共有していくことが課題といえる。



#### 4. 今後の課題

- (1) 継続して学内 ICT 環境の管理・監視を行い、利用者の利便性を損なわないよう適切な環境を維持できるよう努める。
- (2) 新たに本学に入学する学生に対して従来同様に iPad を貸与し、全員が iPad を所持し学習に利用できるよう準備する。また、そのための説明会の開催やマニュアル作成等を随時行う。引き続き eラーニングシステムの利用促進策について検討する。
- (3) 関係事業グループと連携してスチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) をはじめとした各 ICT システムの有益な使い方に関して議論していく。随時利用者から意見を収集して機能改善を行い、より学生指導に有益なシステムに進化させる。
- (4) これまでの事業をまとめた情報 (成果報告書) などを Web サイトに整理して掲載し、連携大学向け情報共有および一般の学外向けの情報公開を継続する。

## (2) 大学コミュニティグループ

### 1. グループ事業の取り組み

本学では産業界ニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」の後方支援を目的として、大学、短大、キャリアセンターや各同窓会が連携した形のコミュニティグループ活動を補助金対象外ではあるが独自に行ってきた。具体的には、卒業生や企業へのアンケート、企業訪問等を通じて、産業界からのニーズ、問題点を把握して今後の大学教育改革にフィードバックしていくことを目指した。

#### 《主な行事》

平成 24 年～25 年度 年間活動内容

(※3. 3年間を通した成果で詳細報告)

時期	報告	活動内容	主体
2月	①	本事業内容に対する企業アンケート（平成24年度）	大・短
6月～3月	②	卒業生就職先企業訪問	大・短
8月	③	創造同窓会総会アンケート実施	大
10月	④	創造祭同窓会ブース開設 創造祭へ来た卒業生にアンケート調査を実施	大
10月	⑤	未内定者向け学内企業説明会、企業アンケート実施、OB 人事担当者参加	大・短
11・12月	⑥	短大 OG 交流実施（先輩の就職体験報告会に OG 参加）	短
2月	⑤	学内企業説明会 企業アンケート実施	大・短
2月	⑦	卒業生就業状況調査書（卒業後3年間）発送・回収	大・短
3月	⑦	卒業生就業状況調査未回答者へ再発送	大・短
4月～7月	⑦	卒業生就業状況調査票（前年度分）回収 未回答者へ追跡調査実施（電話確認）集計、分析	大・短

### 2. 活動成果（平成 26 年度）

事業最終となる今年度の各活動を報告する。

平成 26 年度の取り組み

月 日	報告	活動内容	主体
4月～7月	①	平成 22、23、24 年 3 月卒業生就業状況調査集計 未回答者へ追跡調査実施（電話確認）・分析	大・短
7月～12月	②	卒業生就職先企業訪問 求人開拓 在学生への教育指導依頼	大・短
10/25-26	③	創造祭同窓会ブース開設 卒業生にアンケート調査を実施	学
10/27（月）	④	企業アンケート実施（就職未内定者対象学内合同企業説明会）	大・短
1月	①	就業状況調査書発送（平成 24、25、26 年 3 月卒業生）	大・短
3月予定	①	就業状況調査未回答者再発送実施	大・短

#### ■ ①卒業生就業状況調査実施

本年も卒業3年以内の卒業生に調査を実施した。結果については、3年間を通した成果にまとめて報告することとする。また、本年度発送（平成 27 年 1 月）分については、集計が次年度にまたがるため、次期の報告とする。今後この調査は全学的に拡大し、キャリアセンターの継続事業とする。

## ■ ②卒業生就職先企業訪問 (7月~12月)

本年度も 34 件の卒業生企業を訪問して、卒業生の元気に笑顔で働く姿を直接見る事ができた。



企業からの評価は『とてもよく頑張っている。』が大多数であったが、なかには『数日勤務してすぐ退職した。』『今の学生の多くは、ストレスに弱く、家などから自立できていない。』や『現場でないと分からないことが沢山ある。就職してからが勉強である。』という意見もあった。急な訪問で卒業生をびっくりさせる場面もあったが、なかには、『とても大変で、学んだ事だけではないことが就職して分かった。』と答えてくれた卒業生もいた。

## ■ ③創造祭同窓会ブースアンケート (10月25日-26日)

今年も大学祭で同窓会ブースを利用した卒業生に、就業についてのアンケートを実施した。結果については3年間を通じた成果で報告する。

## ■ ④企業アンケート実施 (10月27日)

就職未内定者を対象とした学内合同企業説明会を実施した。そこでの企業からの本学学生の印象について以下のものであった。(回答 24 社)

- ・真面目そうな学生さんが多いと感じた。(IT系)・やや消極的に感じた。(運送業)
- ・真面目で大人しい人が多い印象を受けた。(サービス小売)
- ・元気がない、積極性がない。(介護)(車両サービス) ・挨拶をしっかりして頂きたい。(介護)
- ・比較のおとなしい。(給食) ・素直で真面目、ややおとなしい。(警備)(ドラッグ)
- ・声が小さい、元気がない。(ディーラー) ・真面目に落ち着いて聞いて頂けた。(食品卸)
- ・真面目な学生が多いと感じた。(ディーラー) ・のんびりしたイメージ(ディーラー)
- ・落ち着いている印象。(設計) ・いろいろ悩みながら就活しているようであった。(飲食)
- ・女子学生からは活発な意見を頂いた。(衣料小売)
- ・短大の学生の方が活発そうな印象。(建築)・熱心に就活していたようであった。(飲食)
- ・明るくハキハキとした人と、おとなしい人に大きく分かれる。(建材卸)
- ・活発で元気を感じる生徒が当社に興味を持って頂いた。(印刷)
- ・メモを取る学生と取らない学生がいた、やはりとったほうが印象はよい。(物流)
- ・この時期でまだ、自分の進みたい道が決まっていないうだ。(宿泊・飲食)
- ・しっかりと質問もされ、コミュニケーションが教育されていると感じた。(介護)
- ・前向きに取り組まれている学生が多く感じられた。(介護)

10月を過ぎて、内定が取れない学生を対象とした説明会であったこともあり、大人しい(積極性がない、真面目)、元気がないという企業からの意見からも、内定を取れないポイントとなっていると思われる。卒業に向けて、ここから如何にモチベーションを上げていくかが課題であり、ゼミ教員とともに対応を行っていく。



図 3. 17 学内合同企業説明会

### 3. 3年間を通じた成果（平成24年度～平成26年度）

#### ■ ①平成24年度 本事業内容に対する企業アンケート実施及び最近の若者動向

本学「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」の内容について、平成25年2月7日の学内企業説明会会場においてこの事業のスタートとしての率直な意見を求めるためにアンケートを実施した。参加した企業30社からの主なコメントを記載する。

- ・この事業については大変よい取り組みである、特にメンタル面での取り組み（メンタルタフネス講座）は、先進的であると思う。
- ・学生さんが自ら立ち上げ運営までされること（プロジェクト活動）は、とてもよい学習になると思う。
- ・大学の講義を聞くだけでは学べないことを肌で感じられるよい機会である。
- ・最近の学生に不足している点は、個性、コミュニケーション能力、積極性、忍耐強さ。専門知識にこだわらず、幅広い知識、応用力が必要である。
- ・10年程前と比較すると、「どんどん出世したい」というガッツのある方が少なくなった。サラリーマン、社会人に対して夢を持てるようにすることが必要と考える。
- ・本学学生に不足しているものとして、明るさ、元気さ（特に男性）、目的意識。
- ・面倒見がよい学校が多いが、ある程度「不自由さ」を経験することで、自ら動き発見する力が養われるのではないかと考える。わざわざ大人が手助けしなくても社会を堂々と渡り歩いて行ける強さを身に着けられるような教育をお願いしたい。

この結果から、企業が望む人材として『ガッツのある人材』『めげない精神力』『周りに配慮できる人材』などを求めており、おおむね本事業を評価したものとする。一部の企業の中には本学出身の人事

担当者の参加もあった。本学学生が目線に立った、現実的で身近な説明は親近感もあり学生自身に意義のあるものであった。

■ ②卒業生就職先企業訪問 (7月~12月)

年度	平成 26 年度	平成 25 年度	平成 24 年度
件数	34 社 (学 17・短 17)	55 社 (学 15・短 40)	57 社 (学 23・短 34)

前年度卒業生の就職先を中心とした企業訪問を実施し、採用した側の思惑や意見・配慮等をできるだけ詳細な部分まで聴取した。また、訪問することにより卒業生の表情から就労状況や職場での人間関係などで苦悩する表情には励ましの助言を行うこともできた。実施したことで早期離職に至る防波堤となり、フォローアップの効果もあったと感じている。

短期大学部を中心に以下の事を報告する。

**どんな人材が望まれているのか企業へのヒアリング**

- ・新しいことにチャレンジする勇氣・バイタリティが欲しい。
- ・思いやりのある、やさしい人材が欲しい。(病院)
- ・コツコツと作業する辛抱強い人材。
- ・積極的に声を出して欲しい。
- ・元気で、明るいこと。人柄がよいこと。性格がよく、素直なこと。
- ・挨拶ができ、他人と会話ができて、まわりに興味が湧くこと。
- ・5年間かけて1人前にするつもりだ。厳しいがしがみついてきて欲しい。(会計事務所)
- ・本当に販売が好きな学生、美味しいと思わせる明るいタイプが欲しい。(製造小売)

**直面している現状**

- ・充実している商業高校の長期インターンシップとの差。
- ・メンタル面が弱い。「働くということ」に対して甘い考えがあること。
- ・「頭」と「体」のバランスが要求されている。考えていることをすぐ行動に移せる。口先で言うだけでなく、実際に行動できる。相手の言うことを理解し(場合によっては先取りし)、行動できる。
- ・採用試験の際、資格はあってもよいが、なくても支障がない。
- ・就職してから社内研修など、活動に積極性が見られない場合がある。
- ・自己肯定感の弱い卒業生がいる。高校生より自分の能力不足を自覚し、気弱になる。
- ・医療事務職は、基本的に欠員補充なので、計画的な採用が少ない。
- ・一度、本学の卒業生の採用で懲りると、戻るまでに時間がかかる。
- ・企業は、「大人の対応」をするので、我々に対して直接文句を言うことは少なく、無言で本学から離れ、求人票を送ってこなくなる。
- ・女子学生においては事務志望が多いが、実際には事務職採用企業は少なく、営業や販売、介護などの専門職で働ける人材を望んでいる。

上記が、卒業生の就職先訪問から得られた意見の一例である。社会の厳しさ、現状をどのように学生に伝えていくか、教育していくか。また、これからの学生に必要なグローバルな視点や自分の考えを人に伝える力(コミュニケーション力)を伸ばすことなど、一人一人の学生を見つめながら指導すること

が重要と考える。今後もこれらを課題として取り組み、さらに学内で情報共有を推し進め、今後の教育の場に役立てていくことが必要である。

### ■ ③創造同窓会総会アンケート調査

平成 25 年 8 月 3 日（土）2 年に一度の同窓会総会にて、卒業生にアンケートを実施した。

実施対象者：本学学部卒業生 50 名      有効回答者数： 29 名      （20 代から 30 代）

#### 1) 現在の勤務先の満足度

・大変満足 2 名    ・満足 15 名    ・普通 6 名    ・多少不満 2 名    ・不満 2 名    他

#### 2) 勤務先のよいところを記入して下さい

<業務・企業について>    ・安定している    ・顧客訪問が多く、様々な個性に触れることが多い

・人の役に立つ仕事である    ・モノ作り    ・ゼロからの商品企画、展開が魅力

・最先端の技術にふれられる

<労働環境・待遇等>    ・県外転勤がない    ・とても仲が良く働きやすい    ・給与

・休暇    ・休日を拘束されない    ・自分の予定に合わせて勤務できる

・長期転勤がない    ・福利厚生がいい    ・人の事を大切にできること

・1 人 1 人の役割に対する責任が大きく、やりがいがある

・自分のものさしを拡大でき、視野が広がり勉強になる

#### 3) 勤務先の問題があると思うところを記入して下さい（自由記述）

<業務・企業について>    ・自由すぎる    ・先が見えない    ・業界がいつまで続くのか不安

・無意味な業務が多い    ・現場の仕事、苦労をトップが知らない

・利用者の思いに応えることができず、自立や生活機能動作の向上に目的を置きがち

・月末、大型連休前後の仕事量が多い

・若い人がすぐ辞め、年配者ばかりの逆ピラミッド

<労働環境・待遇等>    ・多忙    ・報告が多い    ・社会的な雰囲気が薄い

・出世しないとモチベーションが低下する

・サービス残業が多い    ・利益が少なく賞与が少ない

#### 4) 平均の残業時間について 1 日平均の残業時間数 回答者 23 名

・なし 4 名    ・0.5～1.5 時間 11 名    ・2～3 時間 6 名    ・3～4 時間 2 名

#### 5) 残業代は支給されますか？ 回答 17 名

・支給される 12 名    ・支給されない 5 名

#### 6) 今の勤務先を後輩に勧めますか？

・はい 12 名    ・いいえ 8 名    ・分からない 6 名    ・未記入 3 名

#### 7) 今後、大学から授業や就職ガイダンスへの協力依頼があった場合、可能ですか？

・はい 9 名    ・いいえ 9 名    ・条件が合えば 6 名    ・未記入 6 名

#### 8) あなたは働き続けるために必要な条件は何だと思いますか？

・給与面 8 名    ・人間関係 18 名    ・精神力 12 名    ・その他 3 名    ・未記入 4 名

（意見）・給与面、人間関係、精神力のうち 2 つは必要、2 つ欠けたら難しい

#### 9) その他意見    ・人と人との関わりが人間の世の全てと知った。教養ももちろん必要だが、まず人として豊かな人材育成が必要かと考える。豊橋創造大学からも人材を出していけるよう人間味ある教育を今後ともお願いしたい。

1 0) 転職をした理由 (転職者のみ)

- ・会社に将来性がないと思った 6名
- ・労働時間が長すぎた (不規則であった) 3名
- ・給与水準が低かった 3名
- ・人間関係が悪かった 2名
- ・キャリアアップのため 2名
- 他

1 1) 在学生から就職相談のある場合は電話をしてもよいでしょうか

- ・はい 4名
- ・いいえ 9名
- ・未回答 16名

学部同窓会総会におけるアンケートは、20代から30代の広範な年代に対する調査となるので、当然、卒業後3年間の結果とは異なると思われる。今回で同窓会総会時に実施するアンケートは2回目になるが、出席する卒業生は正規職員で働いている人が多く、勤務先の満足度も「大変満足」・「満足」が17名と約57%の卒業生が満足と答えている。また、回答者29名のうち9名が転職経験者で約3割となっている。学部1期生が卒業してから15年が経過したことから見えてきたことは、同窓会に出席する卒業生は現状に不満があっても最初に就職したところで頑張っており、約7割が定着している結果となっている。



図3. 18 同窓会総会アンケート実施



図3. 19 創造祭卒業生同窓会ブースアンケート実施

■ ④創造祭学部卒業生同窓会ブースにおけるアンケート調査

『創造祭』(学園祭)の交流の場として学部卒業生を対象とした同窓会ブースを開設した。

実施日：平成24年～26年10月創造祭開催日2日間

年度	平成26年	平成25年	平成24年
実施日(土・日)	10/25、26	10/26、27	10/27、28
有効回答数	38	18	38

会 場：豊橋創造大学 B22 教室

勤務先に関する就職のアンケートを実施したが、調査項目の統一された25年、26年分をまとめて報告する。有効回答者は56名で概ね勤務5年から10年程の卒業生が多い。

- 1) 今の仕事の満足度は、『満足・普通』で43名。『不満・多少不満』で12名であった。
- 2) 勤務先の『良いところ』は、安定している、人の役に立つ、尊敬できる先輩や上司が多い、明るく働きやすいが多い。
- 3) 『悪いところ』では、多忙・サービス残業、先が見えない、給与が低い、時間が不規則(仕事が突然増える)となっており、5年以上働いた卒業生が多く、今回の調査では人間関係が問題というウエイトは、新人入社3年以内の場合よりも低いように思われた。

- 4) 平均の残業時間について 1日平均の残業時間数 回答者 11名  
 ・なし 8名 ・0.5～1.5時間 23名 ・2～3時間 13名 ・3～4時間 8名
- 5) 残業代は支給されますか? 回答 16名  
 ・支給される 30名 ・支給されない 16名 ・役職になったので出ない 3名
- 6) 今の勤務先を後輩に勧めますか? 回答 53名  
 ・はい 10名 ・いいえ 17名 ・分からない 26名
- 7) 今後、大学から授業や就職ガイダンスへの協力依頼があった場合、可能ですか?  
 ・はい 10名 ・日程が合えば 14名
- 8) あなたは働き続けるために必要な条件は何だと思いますか?  
 ・人間関係 36名 ・精神力 26名 ・給与面 20名 ・他 4名

人間関係がトップで 36名だが、問3)の『今の会社の悪いところ』には入っていないことから、人間関係は重要であるが、今の会社ではある程度 問2)の尊敬できる先輩や上司が多いのように満たされているものと思われる。

- 9) 転職者の理由 ・会社に将来性がないと思った 7名 ・長時間労働（不規則であった） 6名  
 ・給与水準が低かった 6名 ・人間関係が悪かった 4名  
 ・家族や私的な事情（結婚を含む） 3名 ・仕事内容が予想と違っていた 3名  
 ・キャリアアップのため 2名
- 10) 在学生から就職相談のある場合は電話をしてもよいでしょうか  
 ・はい 5名

同窓会ブースに出席してアンケート回答した卒業生は前項（③創造同窓会総会アンケート調査）と同様に正規職員で働いている人が多く、勤務先の満足度も「大変満足」「満足」が 43名と 8割の卒業生が満足と答えている。また、回答者 56名のうち 12名が転職経験者と約 2割が転職を経験しているが、同窓会ブースに出席する卒業生は多少なりとも現状に不満があっても最初に就職したところで頑張っており、約 8割が定着している結果となった。

働き続けるために必要な条件は、1位に人間関係、2位に精神力、そして 3位が給与面であり、前項の③創造同窓会総会アンケート調査も同様な結果となっている。よって本学のこの事業で養成しようとしている『メンタルタフネス』は重要だと考える。また、OB・OGとして母校への協力などを前向きに考えてくれている卒業生も多く、卒業生を招聘する授業や就職ガイダンスへの協力賛同者が 10名ほど発掘でき、卒業生からの求人情報も得ることができ収穫となった。

また、給与面も 3位に入っていることから、初任給だけではなくこれからは将来的な年収にも関心を持つ時期になるかもしれない。この様々な事を在学生に指導していかなければならない。次年度以降も引き続きアンケートを実施し、卒業生の動向を見ていきたい。

#### ■ ⑤学内企業説明会 企業アンケート実施

秋の学内企業説明会（平成 24年 10月 29日開催 34社）、春の『三河地区企業学内研究セミナー』（平成 25年 2月 9日）それぞれ、3人の本学 OB 人事担当者が参加した。

秋の『学内合同就職説明会（平成 25年 10月 28日 32社）』、春の『三河地区企業学内研究セミナー（平成 26年 2月 8日 32社参加）』、秋の『学内合同就職説明会（平成 26年 10月 27日 31社）』の各説明会において、本学学生の印象について、参加企業の皆様に簡単なアンケートを実施した。



【秋の『学内合同就職説明会（平成 25 年 10 月 28 日）』】

- ・積極的でよい 8 社                      ・真面目な学生が多い 2 社
- ・明るく疑問にもった事をそのままにせず質問するという社会人として必要な要素を兼ね備えている子が多いと感じた。 4 社
- ・熱心に聴いている姿に好感が持てた。 2 社                      ・おとなしい印象だった 3 社（営業職）。
- ・何がしたいのか、そのためにどのように就活を行っていけばよいか手探り状態。
- ・人柄がよく、素直でおっとりしている印象だった。 2 社
- ・会社の予備知識がもう少しあるとよい。                      ・礼儀正しい。
- ・地元学生が多い。                      ・あまり積極的ではない。（介護）
- ・他校にも言えるが、会場入り口でなかなか入ろうとしない学生が気になった。
- ・学園祭実行委員を経験された積極的な生徒が参加してもらえてよかった。
- ・元気のある学生とない学生がいたように感じられた。
- ・どんな仕事をしたいのか、的を絞れていない学生が多く、この時期に的が絞れていないと難しいと思う。

【春の『三河地区企業学内研究セミナー（平成 26 年 2 月 8 日）』】

- ・真面目な方が多い。 13 社                      ・おとなしい学生。 7 社                      ・反応がない。                      ・内向的。                      ・礼儀正しい。
- ・友達と固まって企業ブースを回っている学生がいる。                      ・質問が少ない。
- ・就職するのはあくまで自分である、もっと個を積極的にアピールして欲しい。
- ・笑顔が良い。 2 社                      ・明るく積極的な学生さんが多い。 3 社
- ・話を聞く姿勢や質問に思っている以上に鍛えられている感じがした。                      ・熱心な学生。 2 社
- ・コミュニケーションがしっかりとれる学生が多い。
- ・まだこれから職種を決めるという感じの学生が多い。

という回答であった。特に気になるのが、本学学生は、『真面目でおとなしい』という企業からの指摘で積極性、社会人基礎力で言う『前に踏み出す力（主体性）』が特に不足しているように考えられる。



図 3. 2 0 学内企業説明会 10 月



図 3. 2 1 学内企業説明会 2 月

■ ⑥短大 OG との交流実施（先輩の就職体験報告会に OG 参加）

『短大 OG との交流の場』として短大キャリアプランニング科 1 年生を対象とした「先輩の就職体験報告会」を実施した。

実施日：平成25年12月5日（木）4時限

会場：豊橋創造大学 B14 教室 在学生参加：55名

OG 講師：医療法人 光生会 天野磨美子さん（平成19年3月キャリアプランニング科卒業生）

1年生を対象とした「先輩の就職体験報告会」を実施し、卒業予定者6名による内定報告に続きOGによる講演を実施した。OGからは実際の医療事務の仕事についての話や社会人になって大変だったこと、学生時代に学んでいた方がよいことなど現役の後輩たちへアドバイスをいただいた。講演後、在学生との交流の場を設け、話を聞いた在学生からは「これを機に今の自分の生活を改め直さなければならぬと痛感することができた」「在学中にしっかりとビジネスマナーを身に付けておきたい」など現役の学生たちにとって貴重な場となった。



図3. 2.2 先輩の就職体験報告会

#### ■ ⑦卒業生就業状況調査

過去3年間の卒業生に対して、就業状況を把握するアンケートを毎年実施している。アンケートは離職率を集計するだけでなく、離職に至った理由等を分析し、在学生の就職指導や各種対策講座へも反映し、安易な離職を防ぐために役立てている。

また、このアンケートでは卒業生との大学コミュニティーを活用した社会人基礎教育を展開させ、在学生が交流できる仕組み作りに役立てることを視野に入れた項目も設けており、卒業後の早期離職を防ぐことに繋げている。

課題としては、アンケートの回収率の問題がある。返信ハガキにおける1回目の回答率は40%であった。再発送を行っても51%に留まり、その後も未回答の卒業生宅へ個別に夜間や休日電話を入れて最終的に8割から9割の回答を得たが、業務量の負担が大きくなっている。また、郵送料もかかるためコストの問題も考える必要がある。

#### 【調査結果】学部127名 短期大学部194名の調査

□大学

調査年	3年以内の離職理由 (上位順)
平成26年	・人間関係が悪かった ・家族や私的な事情 ・キャリアアップのため
平成25年	・家族私的な事情 ・長時間労働 ・給与水準が低かった
平成24年	・長時間労働 ・人間関係が悪かった ・期限付きの採用であった

□短大

調査年	3年以内の離職理由 (上位順)
平成26年	・人間関係が悪かった ・長時間労働 ・適性に疑問を持った
平成25年	・人間関係が悪かった ・長時間労働 ・適性に疑問を持った
平成24年	・人間関係が悪かった ・長時間労働 ・仕事内容が予想と違った

□学部+短大3年間調査合計

調査年	3年以内の離職理由 (上位順)
平成24年～26年	・人間関係が悪かった ・長時間労働 ・適性に疑問を持った

以上のような結果であった。若者の職場ではトータル的に人間関係の難しさ、長時間労働の問題があるような結果だ。男子学生の多い学部では、長時間労働、人間関係の問題が多いように見える。一方、卒業生の全員が女子である短期大学部では、特に医療事務への卒業生も多く、人間関係が大変重要で、同僚や先輩、管理者とのコミュニケーションは重要な課題といえよう。長時間労働については慢性化している職場があったり、企業側の環境問題であり、新人としての立場では改善できない要素もあると思われる。また、個人レベルではストレス耐性メンタルタフネス、コミュニケーション力の問題があるように感じる、これは最近の若者に共通の課題といえるのかもしれない。

どんな仕事でも3年間は我慢して従事しないと仕事の本当の面白さ、充実感、達成感は味わえないと言われているが、早期離職は、本人にとっても、企業にとってもデメリットとなるので、今後もこの調査は、卒業生向け、企業向けを含め全学的に継続性を持った調査をしていく方針である。

#### 4. 今後の課題

本活動は「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」の後方支援を行ってきたが、本学学生の長所、短所をしっかりと分析し、教育改善を行うために学部、短大へカリキュラムの提案も含め、結果を積極的にフィードバックしていきたい。

また、卒業生アンケート、離職調査、企業訪問は、今後も継続して行っていくが、従来の経営学部の他に保健医療学部理学療法学科、看護学科、短期大学部ではキャリアプランニング学科の他に幼児教育・保育科を加えて、全学的な取り組みとして行っていく。今後も定期的に卒業生からの要望や企業からのニーズをくみ上げ、教育改善に活かしていくような後方支援活動をキャリアセンターが行っていく必要がある。

# 全体の総括

# 4



## 4. 全体の総括

定員割れを生じ始めたキャリアプランニング科は、平成 24 年度に産業界ニーズ補助事業に応募すると同時に「キャリアプランニング科あり方検討会」を立ち上げ、カリキュラムの見直しを始めた。

本学の取組が採択されたため、産業界ニーズ補助事業の成果を取り込む形で「あり方検討会」の議論は進んでいった。東海 A チームの達成目標の 1 つに「地域・産業界のニーズの把握と反映」があるが、地元の企業・金融機関・病院等を訪問し、本学の教育内容に対する要望や卒業生に対する意見・感想を求め、それらを新規カリキュラムに反映させた。

今日、大学の教育改革では、「アクティブラーニング」「インターンシップの高度化」「社会人基礎力育成」といったキーワードが並ぶ。東海 A チームのもう 1 つの達成目標に「アクティブラーニングやインターンシップ強化」が挙げられており、本学は、3 年間に渡る産業界ニーズ事業に参加することで、これらの分野における教育力を高める形でカリキュラム改訂ができた。

本学では、以下の項目をチェックリストに挙げて、教育改革を進めてきた。

- 学修成果が積み上がる形でカリキュラム構成できているか
- 社会人基礎力育成を意識してカリキュラム構成できているか
- キャリア教育が組み込まれているか
- 地域連携活動が組み込まれているか
- 専門学校との差別化を図る教養教育が組み込まれているか
- 資格取得を積極的に支援しているか
- アクティブラーニングを意識して授業を進めているか
- 公務員分野を新たに加え、インターンシップを活性化できているか

産業界ニーズ補助事業を活用する形で、平成 26 年度から「新生キャリアプランニング科」として新カリキュラムを始動できた。平成 26 年度は、タイミングよく短期大学基準協会の第三者評価を受け、新生キャリアプランニング科のあり方、新規カリキュラムについて評価を受けることができた。

産業界ニーズ補助事業を活用して教育改革を積極的に進めてきたわけだが、教育改革が進んでいる具体的な内容が保護者・高校生に浸透していくのには時間がかかり、定員割れを改善できていないのは残念である。

本学の取組は、平成 26 年度秋から公開された「大学ポートレート」でも積極的に公開している。

産業界ニーズ補助事業を活用することで、キャリアプランニング科を地域社会に貢献できる短期大学に改革することができた。今後とも、本学の取組を広報し、改革を継続し、定員確保に努めていく。

産業界ニーズ補助事業の運営に際し、ご協力いただいた関係各位の皆さまに深く感謝いたします。ありがとうございました。



# 補助資料

# 5





# 1

## プロジェクト活動成果報告書 (教員)

大学生こっくさんのクッキング教室(こどもクッキング)& 「縄文クッキーをつくろう」 担当教員:朝倉 由美子	73
女子力を活かした路面電車への企画提案 担当教員:伊藤 圭一	76
駄菓子の世界を調べる 担当教員:今泉 仁志	79
「体験型 和食」プロジェクト 担当教員:木下 賀律子	82
働く意欲の向上を目指す取り組み 担当教員:中島 剛	87
医療機関の掲示物の適正化 担当教員:細谷 邦夫	92
We ♥ Rose プロジェクト ～バラ生産農家と提携した青いバラの制作と販売～ 担当教員:村松 史子	94



## プロジェクト成果報告書（教員）

チーム名（ゼミ名）		食の伝達・食育プロジェクト（朝倉ゼミ）
テーマ		大学生コックさんのクッキング教室（こどもクッキング）＆「縄文クッキーをつくろう」
組織	連携先	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊橋市こども未来館 ココニコ</li> <li style="padding-left: 20px;">加藤 雄規 0532-21-5525</li> <li>・豊橋市文化財センター</li> <li style="padding-left: 20px;">村上 昇 0532-56-6060</li> </ul>
	担当教員	朝倉 由美子
	メンバ (◎ゼミ長、○副ゼミ長)	岩瀬 友美、 ○河合 沙季、 菅谷 美帆、 鈴木 優、 高橋 美子、 恒吉 弘子、 仲田 有里、 ◎中村 玲佳、 盛田 夏来、 矢筈原 説子、 山下 莉奈、 合計 11 名
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		<p>女性の労働環境や食環境の変化で加工品や中食、外食が増えて家庭で食事を作る機会も減り、家庭での料理の伝承（食育）も薄れていると思われる。そこで、子どもの頃から食事を自分で作る楽しさや必要性を学び、技術を身に付けて家庭で調理した食事を家族と共に楽しんで欲しい。調理師コースの学生は調理の楽しさを知っている。そしてそこには段取りと周囲との関係が必要であることも重ねる調理実習の中で体得している。しかし、そのことを発信する力は弱い。そこで、学んだ調理理論や技術と料理を作る際の段取りを外部に発信することを通して、料理の楽しさを伝えるとともに、学生のコミュニケーション力、技術指導力、全体に気を配る心を育成するために、小学生対象のクッキング教室を実施する。</p>
プロジェクトの活動内容		<p>(1) 年間実施回数 4 回とし、実施時期に合わせた献立を考えた。 レシピ（試作用と当日の持ち帰りレシピ）、献立に関連した項目を取り上げた食育コラム、材料発注表、タイムテーブル作成（当日進行役兼務）の担当に分かれて進めた。</p> <p>(2) ココニコ事前挨拶と会場下見（5月9日） キッチンの配置や設置されている調理器具や食器等の確認を行った。（iPadで撮影記録）</p> <p>(3) 事前に試作を重ね、手順や問題点を検討した。 タイムテーブルの配列を話し合い、進行担当者の話し方や時間配分などの確認を行った。</p> <p>(4) 前日：仕込み、材料の計量、下処理等</p> <p>(5) 当日：会場到着後、施設責任者に挨拶をして支度に入った。 各台での手順の確認を行い、参加者を迎えた。 進行役はタイムテーブルに沿って、子どもたちの進み具合を見ながら手順の指導を行った。メンバーを2人ずつ各調理台に配置し、子どもたちと触れ合いながら、けがの無いように気を配りながら、料理の楽しさを感じてもらえるように努めた。</p>

	<p>(6) 参加者には試食後にアンケートに記入してもらい、当日の評価をしてもらった。アンケートは担当学生が持ち帰り集計した。</p> <p>(7) 参加者を送り出し、会場の清掃と確認を行い、責任者に挨拶をして終了した。</p> <p>(8) 12月19日にプロジェクト発表を行い、プロジェクト活動を終えた。</p> <p>(9) 1月9日最終日は反省会とお疲れさまパーティーを兼ねて簡単な調理で出来る食事会をして1年間のゼミ活動を終えた。</p>
<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<p>(1) 日程の設定を前年度12月時点でココニコと調整したため10月実施を避けられたこと。</p> <p>10月は町内の祭りや豊橋まつりと重なると参加者がかなり減り、学生のモチベーションも下がった過去があり、本年度はそれが避けられたため多くの参加者を迎えることができ、賑やかに終えることができた。</p> <p>(2) リーダーの人選でゼミ長は自発的に申し出があった。その後2グループに分けてそれぞれのリーダーにゼミ長と副ゼミ長を担当させたところ、献立の検討がスムーズに進んだ。</p>
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<p>(1) 2グループに分けたことで両グループ間の交流が弱くなった。担当以外の回では内容についての把握や外からの目線での気配りに欠けることとなった。</p> <p>(2) できるだけ自発的に行動することを期待して進めたが、進展が遅くなり、期日が迫って来た時に手を貸してしまったことがあり、自発行動が伸ばせなかった。</p>
<p>学生の自己評価アンケート結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<p>第1回目は子どもとの接触経験が少なく、進行指導ができるか不安の学生もおり、ごこちない様子が見え、計画と異なる事象の時には指示を仰いでいたが、回を重ねるうちにスムーズになり、子ども間の作業の配分や指導通りに進められていないときなどのトラブル対応も自己判断で軌道修正して仕上げることができていた。アンケート記述にも「人に教えることは自分の勉強にもなった」「子どもたちと楽しく作ることができた」「楽しかったのもっとやりたかった」「責任を持って取り組めた」と子どもクッキングから得られたことは大きかったことが確認できた。</p> <p>しかし資料作りにおいてPCの操作力には個人差があり、苦手な学生は得意な学生に応援を頼み、自ら取り組むという姿勢が弱かった。今後は苦手分野の向上へ誘導することは課題の一つとなった。</p>
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<p>料理を学ぶ学生が「料理」をツールとして活動することは入りやすいことであり、どの学生も積極的に参加できていた。</p> <p>持ち帰りレシピや食育コラムなどの文書作成には、対外的なものであるという意識を植え付けながら修正させて行き、前年度の先輩の資料を参考にしつつ、それよりいいものにしたいという意欲で取り組んでいた。</p> <p>本人以外の目からの意見を求めるために担当者以外の目線で素案時の資料に目を通して疑問点を指摘させた。教員が気づいてもその指摘や意見が出ない場合は気づくように言葉がけをしてできるだけ学生からの改</p>

	善案を出させるようにした。
<p>学生の資質の向上度合についての感想</p> <p>次の 4 つの観点から</p> <p>(1) 主体性</p> <p>(2) 計画力</p> <p>(3) メンタルコントロール力</p> <p>(4) 傾聴力</p>	<p>前述の自己評価アンケートでは学生自身は全体的に良い評価であったが、教員から見た向上度合いの視点では元々持った資質のまま、特に向上が目立った学生はいなかったと感じている。ただ、学外での活動、もしくは仲間以外の人目がある所で活動することは緊張感があり、せざるを得ない環境下で普段ではできない行動も実行できたことは社会経験としての効果があったと評価する。</p> <p>(1) 主体性: 評価では 3.5 ということは「もっといろいろやりたかった」と「やってみてよかった」の半々であったということである。好きな料理が主たるツールであったため、献立を決める際にも早く決まった。そういう点では楽しく進んで参加したことは主体性の視点では評価できた。ただ、気の合った仲間と 2 グループに分かれて進めたことは気兼ねがなく参加は出来たが、性格や意欲の違いにより自発的に工夫したり問題点の修正などへの意見を出さず、仲間について行動しただけの者は主体性の育成に到達できていないようだ。</p> <p>(2) 計画力: 大まかな流れは分かっているが、細部への配慮まで気配りできた者は少なかった。「よりよいもの」「手落ちはないか」への執着力が弱い。自己評価では平均 3.2 で「計画より遅れはしたがやるべきことはやった」ということが多かったことは、教員が出した計画に沿って出来たということであり、それ以外に関して気を配り自発的に行動できたかという点では満足ではない。実際に準備の際に最終点検の十分な念押しをしなかったため忘れ物が生じ急遽調達に走った。その場合も、何がいけなかったのか反省ができた者と自分に非はないと言わんばかりに関心を示さなかった者もいた。こういうことは場数と失敗の経験が必要であるが、外部発信のイベントでは失敗は許されないため、教員の指摘により進められたこととなった。</p> <p>(3) 傾聴力: 学生の評価は 3.5 で無難な評価であった。「アイデアを出し合いより良い活動になるようにした」が 6 名、「普段あまり話をしない人とも話をする事ができた」が 2 名ということである。意見交換の際の場面を想像しての評価であろうが、言いたいことが言える仲間での意見が盛んに出たことが傾聴力と言えらば一部の学生にはその力はあった。しかし、CKP によって伸びたかどうかの評価は弱い。ほとんど話をしなかった(性格的にできなかった)学生もいたのでこの評価には疑問が残る。</p> <p>(4) メンタルコントロール力: 嫌なことや面倒なことが何かは個人差があり、子どもが苦手とする学生も実際には子どもを楽しくリードしていたが、これが面倒なことだったのか、それとも文書作成が嫌なこと、面倒なことだったのか等、対外的な面か学内でのことかという細部に関しては補足説明がないので不明である。しかし、子どもに料理指導をすることに関して初めはぎこちなかったが次第にリズムが出てきたことは、慣れることでメンタルコントロール力がアップしたとも言えるであろう。</p>

チーム名（ゼミ名）		路面電車プロジェクト（伊藤ゼミ）
テーマ		女子力を活かした路面電車への企画提案
組織	連携先	企業名 豊橋鉄道株式会社 代表者名 梅村 仁朗
	担当教員	伊藤 圭一
	メンバ	国崎 絵里菜、北川 千鶴、吉澤 佳穂、足達 恵理香、大井 杏菜、大橋 未来、小倉 萌、篠原 楓、鈴木 千尋 合計9人
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		<p>豊橋市を代表するもののひとつに路面電車が。学生にとっては、代表しているものという認識はあっても身近に感じていない。「ちくわ」や「ブラックサンダー」の広告がついている、電車が来ると車の運転が怖い・・・という程度の認識である。そこで、路面電車について感じたことを企業の方に聞いていただき回答を受ける座談会とイベントへの参加を通じて、企業というもののあり方を知ることが意図している。そして「社会人」としての考え方のヒントになるのではないかと。なぜ企業のは、そう回答されるのだろうと理由を考えることから、社会における企業の営業、もっと大きな視点での企業経営について考え、社会人としての準備をしていこうというところまでつなげることが目的です。</p>
プロジェクトの活動内容		<p>① 路面電車に乗ってみる 路面電車に乗ってみて、そこで気が付いたことをまとめてみた。</p>  <p>② 豊橋鉄道の方に報告する 豊橋鉄道の方に実際に来ていただき自分たちの意見を聞いていただいた。そこでは企業活動とはなんでも、私たちが思うことを実践していけばよいのではなく、そこには確たる理由があることがわかった。そして、企業側から「あるべき公共交通機関とはなんですか」という課題を出していただきました。その課題に応えるべく活動しました。</p>



### ③ 課題の報告をする

あるべき公共交通機関とはという課題についてひとりひとり答えていき、豊橋鉄道さんからの意見をいただいた。そのときに、企業としての意見の聞き方、実行可能かどうか、そして公共交通機関を維持することの難しさを感じることができた。不便を感じていて、改善をして提案しても、実際には実行することが難しい・・・この状況を理解することができた。便利にしても採算が取れるかどうかわからない・・・この苦しい現状から、鉄道会社は「今のお客様」と同時に「将来のお客様」を育てることに力を注いでいることがわかった。

### ④ 豊鉄感謝祭に参加する

豊橋鉄道 90 周年記念に「創立 90 周年を機に、感謝の気持ちとして地域の皆様に来場していただけるイベントを行い、お子様をはじめ地域の皆様が路面電車と触れ、普段とは違う姿を見ていただくことでより親しんでいただこうと企画された」感謝祭の中に「わんぱく電車ひろば」という子ども向けのイベント会場に参加した。



### うまくいったこと (成功事例)

企業の方と座談会を何度かすることで学生たちが企業の姿勢と言うものに気が付いた。お客様ではなく企業の立場から考えることの違いに気が付けた。お客様相談室の話は、サービス業だけでなく相手の意見の聞き方の勉強になったようである。特に就職活動中の学生には良い勉強になった。



<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<p>夏休みのイベントに参加をすることができなかったことと、企業側のイベント計画がプロジェクトの流れと合わなかった。感謝祭に参加をしてから提案するまでの時間がなかったため、企画の提案という成果まで上手く到達しなかった。</p>
<p>学生の自己評価アンケート結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<p>仲良く言いたいことが言える雰囲気だったという感想であった。言いたいことが言える雰囲気は働くときにもとても大切である。事務職として働く学生が多いので雰囲気作りのためにどうしたらよいか考えていく力が身についたと思われる。</p> <p>昨年度からの継続の企画になり、学生だけが入れ替わったとスタートしたところ、担当者まで入れ替わり「初めて行うのと同じ」感じのプロジェクトと途中から変わった。その方が学生にとっても教員にとっても緊張感が生まれてよかったと考えている。昨年度は看板が設置されたが本年度はまだ、意見が企業での形になっていないが、それは外観上の成果であり、学生が企業から学んだことは昨年と同じかそれ以上と言える。</p>
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<p>ブレインストーミング</p> <p>とにかく意見を出し合い、否定をしない信頼できる雰囲気を作ることに工夫をした。何事も雰囲気が大事であること、「否定されない」ということは「信頼されていると感じる」瞬間であることを学生たちは体得したと思う。否定はそれ以上の信頼をお互いに築いてからであると学生たちに理解できるように工夫した。</p>
<p>学生の資質の向上度合いについての感想</p> <p>次の 4 つの観点から</p> <p>(1) 主体性 (2) 計画力 (3) メンタルコントロール力 (4) 傾聴力</p>	<p>(1) 主体性 イベントの手伝いや企業の方と話をするときには教員は全く助けませんでした。そういう意味において自分たちで前に進んでいく主体性が徐々についたと思われる。</p> <p>(2) 計画力 企業の方は必ず計画的に話をされるので自分たちの無計画な点に気が付いて改め始める様子が見られた。</p> <p>(3) メンタルコントロール力 対学生、対教員以外の人間関係を体験することによって場の雰囲気を読み我慢する力が育った。</p> <p>(4) 傾聴力 否定しないというブレインストーミングから「聴く力」がついた。</p>

## プロジェクト成果報告書（教員）

チーム名（ゼミ名）		お菓子探検隊（今泉ゼミ）
テーマ		駄菓子の世界を調べる
組織	連携先	企業名 （有）イトウ製菓 代表者名 伊東 秀和氏
	担当教員	今泉 仁志
	メンバー	伊藤 ゆか、吉川 梨奈、平石 梨紗、荒木 恵美、高柳 祐実 合計 5 名
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		<p>豊橋の「お菓子・駄菓子」をキーワードにして、プロジェクト活動を展開する。</p> <p>●テーマ選定理由 豊橋に関係するキーワードを書き出し、KJ法で試行錯誤していたとき、「お菓子」について調べたいという意見が学生から出てきて、プロジェクト活動として具体的にどんなことができるのか議論を進めた結果である。</p> <p>●教育目的 ものごとを進める上で、プロジェクトの考え方が有効なことを教える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・計画することの重要性を教える。</li> <li>・全体を見通し、段階的に進めていく考え方を教える。</li> <li>・PDCA サイクルを回して改善することを教える。</li> <li>・仲間同士のコミュニケーションの重要性を教える。</li> <li>・失敗を経験しておく大切さを教える。</li> </ul>
プロジェクトの活動内容		<p>●プロジェクト活動の内容 目標とした大きな活動は、3つである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・豊橋を中心とした地域のお菓子メーカーを調べる。</li> <li>・お菓子工場を見学する。</li> <li>・創造祭で、この地域の「お菓子・駄菓子」を販売する。</li> </ul> <p>具体的な活動は、以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・菓子業界の概要、歴史を調べる</li> <li>・愛知県の菓子業界、特色を調べる</li> <li>・地方の駄菓子屋の状況を調べる</li> <li>・菓子と風習（お祭り、嫁入り菓子）を調べる</li> <li>・菓子と年中行事を調べる</li> <li>・菓子の季節性について調べる</li> <li>・豊橋の菓子メーカーを調べる</li> <li>・駄菓子の問屋を調べる</li> <li>・売れ筋商品を調べる</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・菓子メーカーの工場見学をする</li> <li>・ディスカントシップ「お菓子のチップス」を訪問する</li> <li>・創造祭で「駄菓子屋」を出店する                  模擬店の出店計画をたてる                  店名 「牛川町の ぷち駄菓子屋さん」                  駄菓子の販売方法を検討する                  仕入れ量を検討する</li> <li>・駄菓子の将来性を展望する</li> </ul>
<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクトテーマは、教員が用意するものではなく、学生達の議論から出てきたこと。</li> <li>・学生にとって興味があり、馴染のあるテーマだったこと。</li> <li>・お菓子工場の見学が、学生達にとって目新しいものであったこと。</li> <li>・模擬店を出すという経験が新鮮だったこと。</li> <li>・協働作業が、学生達の連帯感を高めたこと。</li> <li>・反省点として、もっと活動内容を豊富なものにできたのではないかという意見が出たこと。</li> </ul>
<p>計画通り進まなかったこと 明らかにになった問題点 (失敗事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員が関与しないと、具体的に進んでいかない面があったこと。</li> <li>・学生同士の時間割を擦り合わせてみると、活動時間の確保が大変だったこと。</li> <li>・プロジェクトの開始時の活動レベルが低いこと。</li> <li>・グループワークの場合、学生間に活動量の差が生じてしまうこと。</li> </ul>
<p>学生の自己評価アンケート結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生達は、教員が実感しているレベルより、概して高い自己評価をしている。</li> <li>・工場見学や店舗調査など、学外へ出るフィールドワークは学生にとって印象深いイベントであるようだ。</li> <li>・プロジェクト成果発表会は、自分たちのプロジェクトを多少は客観的に見る機会となっているようだ。</li> <li>・5 人という小規模のプロジェクトだったが、それが学生達の親密度を増したようだ。</li> <li>・やれなかったことに対する振り返りが浅い。自分たちがやれなかったこと、こうすればよかったという意見はあるが、ではもう一度チャンスが与えられれば本当にやれるものなのかという深い反省はない。</li> </ul>
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクト活動で毎年苦勞するのは、最初のテーマの選定である。アイデア出しをする段階では、ブレインストーミングや KJ 法などの手法を学生達に紹介してやらせてみた。</li> <li>・ディスカッションは、学生達だけではなかなか活発な意見交換にはならない。ヒントやキーワードを与えながら、地味に見守る努力をした。</li> <li>・学生の成果報告書や発表用のスライドでは、なるべく介入しないよう</li> </ul>

	<p>にし学生の自主性にかかなりの部分を任せた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大きなイベントがあるたびに、振り返りのための反省会をもった。</li> </ul>
<p><b>学生の資質の向上度合についての感想</b></p> <p><b>次の 4 つの観点から</b></p> <p>(1) 主体性</p> <p>(2) 計画力</p> <p>(3) メンタルコントロール力</p> <p>(4) 傾聴力</p>	<p>(1) 主体性</p> <p>プロジェクトテーマについては、学生達に自由に意見交換させた。春学期はかなり教員が介入して進めたが、秋学期からは学生に任せるようにした。</p> <p>(2) 計画力</p> <p>創造祭で駄菓子の模擬店を出店するという目標を与え、具体的段取りをさせた。</p> <p>成果発表会までの段取りも、学生の自主性に任せた。</p> <p>(3) メンタルコントロール力</p> <p>創造祭の模擬店で、地道に商品を売る経験をさせた。</p> <p>(4) 傾聴力</p> <p>秋学期に入り、具体的活動をする際には、お互いに熱心に意見交換をするようになっていった。</p>

チーム名（ゼミ名）		木下ゼミ（クッキング+α）
テーマ		「体験型 和食」プロジェクト
組織	連携先	<p>豊橋茶業農業組合 （担当；林 栄三 氏） 〒441-8157 豊橋市上野町字新上野 23 Tel/Fax：(0532)45-4973 / (0532)45-4970</p> <p>日本料理「やまもと」 山本 勝廣 氏 〒441-8003 豊橋市小向町字木太小向 90 Tel/Fax (0532)32-3027</p> <p>株式会社 中野新松商店（牛川工場） 工場長 見郷 雅洋 氏 〒440-0006 豊橋市牛川町字道下 79 Tel/Fax：(0532)53 -5948 / (0532) 52 -0159</p> <p>伊那食品工業株式会社 名古屋支店 営業部 眞部 裕也 氏 〒485-0059 小牧市小木東 1-49 Tel/Fax：(0568)-75-6660 / (0568)-75-6699</p>
	担当教員	木下 賀律子
	メンバー	伊藤 穂乃香，稲垣 琴音，菅沼 知世，林 奏絵，疋田 紫苑 合計 5 名
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		<p>2013 年、「和食：日本人の伝統的な食文化」がユネスコの無形文化遺産に登録された。海外では日本料理に人気が集まっているにも関わらず、我が国では特に子供や若者たちの和食離れが問題になっている。そこで調理師資格を目指す学生達と身近な食材を使った保存食作りや日本の代表的な行事食であるお正月料理に取り組み、自らの体験を通して改めて和食について考える機会を持つ。そして、その価値や新しい魅力を見つけ出し、和食文化の継承に取り組んでいきたい。</p> <p>①昨年引き続き、お茶について学んでいく。 特に今年は日本茶をテーマに勉強していく。</p> <p>②iPad などを利用し、日本料理の歴史を学ぶ。</p> <p>③料亭料理としての日本料理を体験する。</p> <p>④季節の食材を利用した保存食を作る。</p> <p>⑤社会人基礎力を身につけるため、 春学期は、6 月 14 日のオープンキャンパス 秋学期は、10 月 25 日の学園祭 などでイベントを実施し、学外の方々との応対や大切な心遣いについて学ぶ。また、チーム内では協調性、忍耐力を養う。</p>

	<p>⑥出しを丁寧に引き、自家製のそばつゆを作る。市販のそばつゆと比較し、違いはどこにあるのか皆で話し合う。</p> <p>⑦春学期末には伊勢神宮に出かけ、日本のルーツに触れると共にメンバー間の親睦を図る。</p> <p>⑧日本茶を使ったお菓子の製作・お正月料理の製作を通して調理技術の向上を目指す。</p>
プロジェクトの活動内容	<p>4月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ユネスコ無形文化遺産となった和食について、資料を参考にしながら各自意見を出し合う。</li> <li>・春の保存食① 甘夏みかんを使ったママレード作り。 応用；甘夏羹・ママレードを使ったチーズアイス</li> </ul> <p>5月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一番茶の茶摘み体験（林 栄三氏の茶畑にて） 豊橋茶業組合の製茶工場にて煎茶の製造工程見学。</li> <li>・春の保存食② 苺ジャム作り。 応用：苺とバナナのジャム作り。</li> <li>・日本料理「やまもと」にて料理の説明を受けながら日本料理を味わう。 テーマ：走り梅雨 (先付け・前菜・吸い物・お造り・しのぎ・焼き物・食事・水菓子)</li> <li>・東三河外食産業展へ学外研修。</li> <li>・オープンキャンパスに向けてのクッキー試作。</li> <li>・豊橋産の新茶を一人ずつ急須で淹れ、香りや味を楽しむ。 お茶に合うお菓子（山栗）も用意。</li> </ul> <p>6月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オープンキャンパスのためのクッキーの焼成とラッピング。 (チョコチップクッキー230人分)</li> <li>・6月14日オープンキャンパス当日 「SOZO カフェ」開催 (CKP 活動実行計画書 作成)</li> <li>・夏の保存食① 梅干作り（塩漬け 6/25・赤紫蘇を加える 7/2・天日干し 7/30. 7/31） 紫蘇ジュース・梅シロップ（梅おろしうどん実習）</li> </ul> <p>7月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本茶を使ったお菓子について調べ、各自のテーマを決める。</li> <li>・お正月料理の歴史を調べ、料理の分担と内容を考える。</li> <li>・定期試験終了後は、お茶を使ったお菓子の試作を開始する。</li> <li>・中野新松商店にて、日本の出し素材「削り節」の製造工程を見学。</li> <li>・「削り節」について、資料を見ながらその歴史・種類・保管上で気をつけることなど、様々な角度から学ぶ。</li> <li>・椎茸・昆布・カツオ節を使って、そばつゆを作り「とろろそば」を</li> </ul>

	<p>実習する。自家製のそばつゆと市販のめんつゆの比較も体験。</p> <p>8 月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 8/1：伊勢神宮に日本人の食のルーツを知るために学外研修。 (CKP 活動中間報告書 作成)</li> </ul> <p>9 月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ お正月料理の試作開始。</li> <li>・ ビギナーズクッキングの打ち合わせ。レシピ検討。</li> <li>・ お茶を使ったお菓子の試作①</li> <li>・ 創造祭当日の役割分担を決める。</li> </ul> <p>10 月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 梅干の熟成が進み完成。応用調理実習。</li> <li>・ 手づくりマヨネーズと応用調理実習。</li> <li>・ ビギナーズクッキング スムーズにクッキング指導ができるよう特訓。 レシピ・材料発注・会場の設営を考える。</li> <li>・ 展示用ポスター・パネル製作に励む。</li> <li>・ お正月料理&amp;お茶使ったお菓子の完成。</li> <li>・ 本番前にビギナーズクッキングのリハーサル。</li> </ul> <p>創造祭当日</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 調理室にて、クラスの作品展示とゼミの作品展示。</li> <li>・ 伊那食品の方をお迎えし、日本の大切な食材「寒天」について研修。</li> <li>・ ビギナーズクッキング、二部制にして開催。</li> </ul> <p>11 月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 和食と日本人の伝統的な食事について、パワーポイントを見ながら勉強。</li> <li>・ おもてなしから連想するものは何か、何が大切か意見を出し合う。</li> <li>・ 抹茶のロールケーキ実習。各自 1 本ずつ箱に入れ、プレゼント用とする。</li> <li>・ 日本料理のおもてなしとして、手巻き寿司を実習。</li> <li>・ (CKP 活動報告書作成 学生)</li> </ul> <p>12 月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ CKP 活動発表会に向けてパワーポイントの準備。</li> <li>・ 世界 (ロシア) の家庭料理ボルシチを実習。</li> <li>・ ゼミの課題レポートについて説明。</li> <li>・ CKP 活動発表。</li> </ul> <p>1 月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ レポート提出、最後の実習；プレーンオムレツ・スープ。</li> <li>・ (CKP 活動成果報告書作成 教員)</li> </ul>
<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ゼミ生の数が少人数であったため意見もまとまりやすく、何事もスムーズに決断し行動することができた。</li> <li>・ 予算と時間が許す限り実習や勉強を取り入れてきたが、学生たちの実習への情熱は衰えること無く、出来うればもっと和食について知りたい、追求したいとの意見が約半数の学生からあった。</li> <li>・ 学園祭では欲張って、多くのイベントを企画し実施することが出来た。 2 度に渡る台風上陸でイベントにかける時間が削られる中、学生は仲</li> </ul>

	<p>間と協力する大切さや集中力を養う力を身に付けるなど人間的に成長することができたと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>活動報告書の作成や発表会のパワーポイントは、ゼミ活動でリーダーシップをとれる学生たちが中心となって作成した。授業の様子を細かく携帯で撮影し、また IT 能力をうまく利用して手作り感のあるパワーポイントに仕上げることができた。</li> </ul>
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>iPad の活用を展開することができなかった。</li> </ul> <p>昨年度までは学生達が iPad を常に持っており何かにつけ触れていたが、今年度は iPhone を使う学生が多く(ほとんど iPad を携帯していないため)、とっさの調べものも iPhone に負うところが多かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ゼミのメンバー同士のコミュニケーションがうまく取れない学生がおり何かと気に掛けたり話しかけて来たが、目に見えて変化することは無かった。ゼミの教室に来るのはいつも一番で、1 年時より明るさを感じるようになったのは嬉しいことであるが、強力な個性の持ち味を生かすのは生易しいことではないと感じた。</li> </ul>
<p>学生の自己評価アンケート結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>予想通りの結果であった。</li> </ul> <p>学生達が積極的に取り組んできた様子が感じられ、それぞれが正直な自己評価であったと思う。</p> <p>ここ数年プロジェクト活動に参加してきたが、今年初めてゼミの時間を持つことができ、集中して活動に取り組むことができたと思う。その意気込みが学生に伝わったのか、ゼミ活動のない短大生活は考えられないという意見も聞こえてきた。調理師クラスという特性を生かしたゼミ活動を今後も継続し、学生達の「学びの活性化」に役立てていきたい。</p>
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<p>創造祭でのイベント</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>作品展示</li> </ul> <p>緑茶・抹茶を使ったお菓子や(日本の代表的な行事食である)お正月料理について各自調べ、試作を繰り返し展示作品とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ビギナーズクッキングを開催</li> </ul> <p>いつも実習を受けている立場から、実習を教える立場になるにはどういう準備や心構えが必要であるか考え、実践する。</p> <p>学内だけでなく外部の方々と触れ合うことで、作品の評価を頂いたり人にもものを伝える難しさを体験する。恥をかきながら、また心の痛みを通して技術の向上や人間の幅を広げることを目指す。ぬるま湯のなかにつかっているのではなく、自ら崖っぷちに立つことで瞬時の判断力を高める効果も期待している。</p>
<p>学生の資質の向上度合についての感想</p> <p>次の 4 つの観点から</p> <p>(1) 主体性</p> <p>(2) 計画力</p> <p>(3) メンタルコントロール力</p>	<p>(1) 主体性</p> <p>リーダーシップを持つ学生とサブの学生で成り立っており、それぞれの立場で話し合いながら活動を進行することができた。上手くバランスが取れていたと思う。ゼミ最後の活動として、2 月上旬にお茶の勉強を兼ねた「京都日帰り旅行」(自由参加)を計画している。今のところ全員が参加を希望している。</p> <p>(2) 計画力</p>



(4) 傾聴力

自分たちのペースで計画し行動すると、後になって慌てることがよくわかったのか、だんだんそのサイクルが早く回転するようになってきたことは、進歩である。秋学期はイベントも多かったため、早めの行動に出る学生も多く、余裕を持ってことに臨むことができた。

(3) メンタルコントロール力

学生の感想の中で、「人間関係にストレスを感じた。」という意見が一件あった。不思議なのは、今まで自由参加でいろいろな場所に学外研修、その他で出かけたが、ほとんど欠席者はいなかった。多分ストレスを感じながらも行動は共にできる強い精神の持ち主であろう。ともあれ好きな実習を擁しているゼミなので、多少面倒なこと等も克服できているのではないかと推察する。

(4) 傾聴力

学外研修先や講演会において、それぞれ貴重なお話を聞く機会に恵まれいつの間にかメモを取る習慣も身につけてきた。振り返りのレポートの中で、「このゼミは、とても内容の濃い授業ばかりであった。」という意見を読み、この1年間の疲れがずっと消えた気がする。熱心に人の話を聞く態度こそが、プロジェクト活動の質を高める基本であると思う。

時々旅行のおみやげと称して、学生達が持ってきたお菓子を皆で分け合いながら食べ、話し合いの場を持てたことは何よりの楽しみであった。

最後に

本ゼミの「クッキング+ $\alpha$ 」の $\alpha$ は、クッキング以外にも何かを学んで欲しいという気持ちから書き加えてみたが、それぞれ $\alpha$ に何を入れることができるのであろうか。いつか、聞いてみたいと考えている。

## プロジェクト成果報告書（教員）

チーム名（ゼミ名）		防犯プロジェクト（中島ゼミ）
テーマ		働く意欲の向上を目指す取り組み
組織	連携先	豊橋警察署生活安全課生活安全 1 係主任 巡査部長 鷺塚 守秀
	担当教員	中島 剛
	メンバ	岡本 恵 古渡 千晴 櫻井 峰帆 豊田 亜耶 中根 萌 古川 史織 林 弥咲 石田 実紗 合計 8 名
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		地域の安全・安心に学生としてどのように貢献できるのか考え、防犯ボランティアチームの活動を通して、人のために働く意欲の向上を目指す活動に取り組むこととした。
プロジェクトの活動内容		<p>4 月 9 日（水曜日）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ゼミにて防犯ボランティアチーム CTS (Clean Team SOZO) の活動について説明し、この活動に参加することを決めて、具体的な活動について話をする。CTS のリーダー、サブリーダーを決める。</li> </ul> <p>4 月 23 日（水曜日）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ゼミにて、CTS の活動について、昨年までの先輩たちの活動（地域巡回、防犯講演会参加、防犯キャンペーンへの参加など）に追加して、地元の保育園や小学校で防犯キャンペーンを行うことを決める。</li> </ul> <p>4 月 30 日（水曜日）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・豊橋警察署の鷺塚巡査部長より、「豊橋市の防犯」について講話を聞き、今後の CTS の活動について再度話し合う。その結果、今までの活動に加えて小学校での防犯活動を行うことを決め、実施する小学校については、鷺塚巡査部長に調整をお願いする。</li> </ul> <p>5 月 14 日（水）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インターネットなどで小学校での防犯活動は、紙芝居で防犯標語の「いかのおすし」を題材とすることを決める。</li> </ul> <p>5 月 21 日（水）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・紙芝居の作画担当、シナリオ担当、歌担当、グッズ担当などの係りを決めそれぞれで活動に入る。</li> </ul> <p>5 月 28 日（水）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第 1 回地域巡回。リーダーを中心に牛川地区の地図を見て、計画的に巡回することを決め、第 1 回の巡回を実施する。</li> </ul> <p>6 月 2 日（月）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・豊橋駅構内で行われた痴漢撲滅キャンペーンに参加する。</li> </ul> <p>6 月 11 日（水）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・紙芝居の大きさを調べるためサポートセンターの桐木さんに相談し、プリンターに取り込めば、大きな紙芝居が可能であることを知り、紙芝</li> </ul>

居の仕様を決める。
6月25日(水) ・グッズ担当者が、いろいろ考えた末、家庭でも防犯について話をしてもらいたいことと一回でなくいつまでも覚えてもらえるように、ミニタオルを提案し、作画担当にデザインを依頼する。
7月2日(水) ・第2回地域巡回。
7月9日(水) ・ミニタオルのデザインが完成する。グッズ担当者がプリントボーイへデザインをもって相談に行く。
7月30日(水) ・ウィルあいちで開かれた第7回女性安全フォーラムに参加し、犯罪被害者の講演などを聞く。
8月6日(水) ・作画担当者がプリントボーイからの提案を入れ、ミニタオルのデザインが決定する。
8月18日(月) ・紙芝居公演が2学期に行われる可能性があることから、ミニタオル発注する。
9月26日(水) ・第3回地域巡回。紙芝居の用紙にハトメをうち、公演できる形にする。
10月10日(水) ・第4回地域巡回。
10月31日(水) ・紙芝居公演を豊橋警察署鷲塚巡查部長と、幼児教育・保育科の中島美奈子先生に見ていただき、ご指導をいただく。
11月11日(火) ・豊橋市「市民の日」でCTS キャプテンの岡本恵が一日豊橋警察署長を務める。
11月14日(水) ・第5回地域巡回。
12月1日(月) ・明照保育園で、年長組園児59名に紙芝居公演をする。公演後にミニタオルを代表の方にお渡しする。
12月9日(火) ・豊橋市立松葉小学校で、1年生77名に紙芝居公演を行う。ミニタオルは、それぞれの担任の先生から防犯の話をしながら児童に配っていただく。
12月12日(水) ・第6回地域巡回。
1月7日(水) ・豊橋警察署署長より、CTSの活動に対し、感謝状を受ける。

<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<p>(1) 紙芝居公演は、初めての試みでいろいろ試行錯誤の毎日であったが、周囲の方の協力を得て無事実施できた。</p> <p>(2) 地域巡回は、日程の調整が難しかったが当初の予定回数を実施できた。</p>
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<p>(1) 街頭キャンペーン活動は、前年の行事数を予定していたが、学生のアルバイトの日程などと豊橋警察署の方との連絡調整がうまくいかず 1 回にとどまった。</p>
<p>学生の自己評価アンケート結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<p>1 それぞれの活動に対する学生の感想 (抜粋)</p> <p>(1) 地域巡回</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の方々と触れ合うことができ、大学周辺のことについても知ることができたので、いい経験になったと思う。</li> <li>・歩いているだけでも防犯に役立つんだと思った。歩いているなかで近所の中学生にあいさつしたり声掛けも防犯のためになっていると思った。自分の住んでいる地域でも実行したいと思った。</li> </ul> <p>(2) 講演会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・豊橋に住んでいるのに知らなかった交通事故の多さや、空き巣の被害の多さにおどろきました。</li> <li>・豊橋警察署の方のお話を聞いて、今の豊橋の事故・犯罪などについて知ることができました。</li> </ul> <p>(3) 研修会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・女性安全フォーラムで、性被害に遭った人の話を聞きました。その後の人生への影響を聞いていると、性被害に対して、もっとしっかり考えようと思いました。</li> <li>・過去の辛い経験から立ち直った強い女性に出会うことができました。とても貴重な話を聞きました。同じ女性として辛くなりました。</li> </ul> <p>(4) 紙芝居公演</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・準備期間が長かったので発表は緊張することなくできました。紙芝居をみんな真剣に見てくれたり、私たちと一緒に呼びかけをしてくれたり、とても純粋な子どもたちにむけて、私たちの紙芝居をすることができて、よかったです。</li> <li>・どうしたら見やすく、分かりやすくなるかを考え、工夫しながら作ることができた。子どもたちを前にして、公演するのはとても恥ずかしかったけど、役になりきれるように気持ちを込めて話すことができたと思う。子どもたちが一生懸命見て、聞いてくれたので嬉しかった。</li> </ul> <p>(5) まとめの感想</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・週 1 回の授業だったけど、その中で様々な活動ができたと思う。月一度の見回りをはじめ、講演会に参加したり、紙芝居を作って公演したり、学園祭での模擬店も出店した。それぞれの準備が大変だったこともあるが、楽しく充実した活動を行うことができた。</li> </ul> <p>2 プロジェクト活動の総括</p> <p>防犯プロジェクト活動は、防犯活動に限定されたプロジェクトである</p>



	<p>ため、当初は戸惑っていた学生も、活動を進めるにつれ積極的に参加するようになった。</p> <p>今年度は、紙芝居公演を小学校で行うことを決め、12月の公演会にむけて、準備を進めた。紙芝居の内容から、作成、配役、その他のグッズを考えるなど学生自身で準備することが多く、意見を出しながら時には反発する学生がいるなど、目標に向かって努力する姿が見られた。結果的には、それぞれの活動について、一人ひとりが考え行動し、反省文からも成長の跡が伺える。紙芝居公演という大きな目標が初めにあったことが、よかったと思われる。</p>
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域巡回やキャンペーン活動では、与えられた仕事をする中で学生たちが工夫し、考え行動したが、紙芝居公演では、企画・立案・行動と具体的な内容の決定から、実践まで学生主体で行われたものであり成長の跡が見られた。</li> <li>・ フィールドワーク             <p>紙芝居の対象となる児童生徒については、関係する先生から教えていただいたり、内容についてはインターネットを通じて情報を収集していた。学生だけでは外部との連絡調整に限界があり、難しかったと思われる。</p> </li> <li>・ ディスカッション             <p>紙芝居公演では、互いに意見を言って一つの形にしていった。内容については、リーダーが中心となり決めていったがそれぞれの学生が意見を言っていた。</p> </li> <li>・ グループワーク             <p>紙芝居も地域巡回もキャンペーン活動も全員参加を原則として行った。互いに協力して活動していた。</p> </li> <li>・ プレゼンテーション             <p>準備時間の関係もあり、一部の学生で準備した。活動全体に対する総括ができていなかったため、自分たちの活動の感想は言えるが、意義や意味づけについては答えられるまでまとまっていなかったと思われる。</p> </li> <li>・ 学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか             <p>防犯プロジェクトの活動が、社会にどのように係わり、役立っているかを講演会などで学習するとともに、行動する中でそれを実感することでより前向きに参加するようにした。また、紙芝居公演という大きな目標を与えることで、学生一人ひとりに、自分の役割が公演全体に果たす役割を考えさせて積極的に行動するように進めた。</p> </li> </ul>
<p>学生の資質の向上度合についての感想</p> <p>次の4つの観点から</p> <p>(1) 主体性</p> <p>(2) 計画力</p> <p>(3) メンタルコントロール力</p>	<p>(1) 主体性</p> <p>紙芝居公演という大きな目標に対し、学生が役割分担をして、それぞれの担当について積極的に活動していった。地域巡回など他の活動については、活動を進める中でその意義を見出して主体的に行動できるようになった。</p> <p>(2) 計画力</p> <p>地域巡回の計画については、CTS のリーダーを中心に計画して実施し</p>

<b>(4) 傾聴力</b>	<p>ていたが、日程調節など学生一人ひとりの都合を調整するのが難しかった。紙芝居については、その内容、原画などは係りの学生が前向きに取り組んで進んだが、歌担当などは途中でやめることとなった。それぞれ与えられた内容に対する取り組む姿勢の差が大きかった。</p> <p>(3) メンタルコントロール力</p> <p>紙芝居公演では、学生同士で取り組む姿勢や意見の違いから、仲たがいをするときもあったが、大きな目標があったことと、学生たちがお互いの性格や力量の差などを理解し、公演を実施することができた。自分と人との違いを見つめることで、集団ではメンタルコントロールが必要なことを体験し、目標を持つことの大切さを学んだものと思われる。</p> <p>(4) 傾聴力</p> <p>学生たちは、素直で、物事に真面目に取り組む姿勢があったため、すべての行事で人の話を前向きに聞くことができ、関係した多くの方からいろいろなことを学ぶことができたと思われる。</p>
----------------	--

チーム名（ゼミ名）		HOSPITAL☆NOTICE（細谷ゼミ）
テーマ		医療機関の掲示物の適正化
組織	連携先	企業名：医療法人積善会 木戸病院 担当者：事務 鈴木 亜沙美  企業名：井澤医院 代表者名：院長 井澤 一宏
	担当教員	細谷 邦夫
	メンバ	佐藤 成美, 中村 真維, 天野 綾乃, 鈴木 彩音, 豊田 桃子, 林 亜衣, 伴 江利子, 鈴木 咲衣, 山田 彩香, 河合 佑理弥, 白井 優名  合計 11 名
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		医療機関が伝えたいことをしっかりと患者さんに伝えられる院内掲示物を作る。 ◆企画意図 病院実習等で医療機関の掲示物の無秩序さを感じ、本当に患者さんに必要な情報が届いているのかを疑問に持った。 そのために必要な、医療法・療養担当規則・施設基準等を学び、実際の医療機関の掲示物を見学し改善提案をする。
プロジェクトの活動内容		4 月 テーマ選定及び協力医療機関の選定 協力医療機関は本学の卒業生が居る所を中心に打診した 5～7 月 医療機関の掲示物の法的根拠及び必要な知識の習得 見やすい掲示物の研究（医療機関はお年寄りや子どもまで様々な患者が居る） 協力医療機関の施設基準等の概要の調査（ネット） 9 月 協力医療機関の訪問、現状把握 10 月～12 月 掲示物の作成 協力医療機関に赴き意見を伺い再構成 等
うまくいったこと （成功事例）		・医療事務員として診療報酬以外に必要な知識があるということを自覚できたこと ・事前の学習をもとに、掲示物に必要な項目を学生達が考えられたこと ・掲示物のデザインが上手な学生を中心に作業が進んだこと ・協力医療機関から求人が貰えたこと
計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 （失敗事例）		・2つの班に分かれての作業だったが、進行具合に差が出たこと ・実際に掲示物を見て貰った際に、A1サイズでは大きくて貼る場所がなく、A2サイズで作り直したこと（事前にしっかりと確認すべきだった） ・文字のレイアウトや不足している項目など、教員が介入せざるを得ない場面があったこと（強い介入では無かったので失敗とは言えないが）

<p>学生の自己評価アンケート結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<p>「楽しかった」レベルの感想が多く、実際に知識として身についたと言える学生は数名に留まってしまったと思われる。</p> <p>掲示物を作るにあたって、どうしてもパソコンが使える学生が中心に活動する事になり、作業員以外は手持ち無沙汰になってしまう事があった。そのため「傾聴力」について低い評価に繋がってしまったのだと思う。当初は3軒の協力を得られそうであったが、結果的に2軒となっしまい、5名と6名のチームになっしまい、やや人数が多く、いわゆるフリーライダーが出てしまった。</p> <p>全体としては、診療報酬の計算や数日間の実習だけでは感じられない医療機関の側面を体験出来て、医療事務職としてのいい経験になっていると考えられる。</p>
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<p>春学期は座学に徹し、医療機関内にある掲示物も、それぞれ法律に基づいて掲示されている事を意識させた。</p> <p>その上で実際の医療機関の掲示物を見て、医療機関の意図と患者の感じ方のズレを考えさせた。</p> <p>自分が受診したときの感想などを出し合い、それを元に議論をした。</p>
<p>学生の資質の向上割合についての感想</p> <p>次の4つの観点から</p> <p>(1) 主体性</p> <p>(2) 計画力</p> <p>(3) メンタルコントロール力</p> <p>(4) 傾聴力</p>	<p>(1) 主体性 プロジェクトテーマについては、基本的には教員で用意した物であるため中庸な評価になっていると思われるが、実際の掲示物作成では学生達のアイデアを元に作成させ、それに意見をする形で進めた。</p> <p>(2) 計画力 掲示物の作成は全て学生達自身で考えたため、かなりのハードルであったと思われる。そのため高い評価も付けているのではないかな。</p> <p>(3) メンタルコントロール力 メンタルをコントロールしなければいけない程のストレスになるような内容ではなかったと考える。</p> <p>(4) 傾聴力 協力医療機関に訪問の際は、卒業生や院長先生に院内を案内して頂いたり、診療機器について解説して貰ったりしたので、かなり興味を持って聞いていた。</p>



チーム名（ゼミ名）		プロジェクト Blue（村松ゼミ）
テーマ		<b>We ♥ Roseプロジェクト</b> ～バラ生産農家と提携した青いバラの制作と販売～
組織	連携先	株式会社 デイジー（渡辺農園） 代表 渡辺 真臣 0531-37-0117
	担当教員	村松 史子
	メンバ	鈴木 佑衣、竹下 千尋、新井 沙季、金光 佑莉、小清水 みゆ 畑野 友希、松井 弓華、浜戸 麻里奈 合計 8名
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		東三河の代表的な産業でもある花農家（薔薇園）と連携をして地域の産業の実態を知り、地域のためにどのような貢献が出来るかを考える。考えた結果を発表し、行動に移すことを学ぶ。 薔薇は多くの人々が愛し、興味を持つものであることから、学生個々の得意とする分野を自覚し、販売の工夫・利益を得る事の大変さを体感し考え、就職に生かす。 その実施内容として ①新鮮な薔薇の販売ルートを学び地産地消のシステムを考えさせる。 ②バラの研究を学園祭に発表し、販売をする。 ③学生の自主性を育てる。
プロジェクトの活動内容		<p><b>4月9日（水） 1限</b></p> <p>①株式会社デイジー 薔薇農園との提携の確認 ②アイデアの集約、取り組み内容の精査、計画 ③プロジェクト名「<b>We ♥ Roseプロジェクト</b>」と決定した。 ③ 年間スケジュールの計画、確認</p> <p><b>5月14日（水） 1限</b></p> <p>① 渡辺氏、来校し農園の状況説明と学生との顔合わせ ②年間の予定を渡辺氏とともに確認</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p><b>5月29日（水） 1限</b></p> <p>①花育士 牧野恵美先生をお招きし、実際の花を選び好きなように自分の考えでアレンジすることにより、花を使ってのびやかな感性、想像力、感動力を体感しました。</p>



**6月5日（水） 1限**

①創造祭における模擬店名を決定。

「プロジェクト Blue」とし、薔薇の販売を決定。

**6月26日（水） 1限**

①8月1日に薔薇園の見学を決定。

**8月1日（金） 農園見学**

① 渡辺農園訪問（ゼミ生8名+教員）全員参加

・ 薔薇の種類と育てる苦労、温度の調整の工夫、良質の薔薇にするために多くの努力がされていることを学ぶことが出来ました。

現地であれば得られない貴重な知識となりました。



一本を育てるために  
他は折り曲げる

- ・その後、B O S S 紹介の渥美半島先端にある地元の特産物を使った店で昼食会を行いました。



9 月 19 日 (金) 1 限

- ① 学園祭に向けて、日程計画を立てました。

10 月 3 日・10 日 (金) 1 限

- ① 学園祭に於けるシフトを決め、準備に取りかかりました。



ポスター掲示してアピール

10 月 17 日 (金) 1 限

- ① ラッピング用品の調達。  
・ガーデン・ガーデンへ出向き、バラのラッピング指導を受けました。

10 月 25 日 (土)・26 日 (日) 「創造祭」

- ① 学園祭バラの販売とバラ文字の掲示を行いました。



出来ました！！



	 <p>青いバラ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学園祭当日は、「青いバラ」を販売。すぐ売り切れました。</li> </ul>
<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①学生への連絡方法として“LINE”を利用したことである。 グループに渡辺氏も参加し、常時学生たちの動きも把握してもらうことができた。</li> <li>②プロジェクト発表のパワーポイント作成を全員が担当を持って行い、達成感を共有することができた。</li> </ul>
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①リーダーが個性的なため、自己的な判断をする場面があり、学生会などに迷惑をかけたことがあった。リーダーの人間性を理解し、プロジェクトを進める必要があった。(事項:チラシに学生会の印が無いいため回収指示が出た。本人はいらないと言い張る)</li> </ul>
<p>学生の自己評価アンケート結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私たち村松ゼミは昨年と同様、株式会社デイジーの渡辺 Boss に協力をいただき、We ♥ Rose プロジェクトを立ち上げました。薔薇園の見学や創造祭での薔薇の販売を行い、薔薇の素晴らしさを改めて感じることができました。今後は周りの人たちに薔薇のプレゼントを薦めたいと思います。 また、薔薇園に行き、種類や育て方などいろいろな知識を学ぶことができ、薔薇ができるまでに多くの手間や時間がかかっていることも知りました。実際に販売をしてみるとお客様への接客の対応がスムーズにできなかったもので、前もって計画をして行動することの大切さを知りました</li> <li>・創造祭で薔薇とお汁粉の販売をし、売るということの難しさを実感しました。よく話し合いをし、皆で協力し合えたらもっとよくなっていたと思います。他にも薔薇について学び、触れることができてよかったです。今後は薔薇のプレゼントなどをして多くの人に薔薇に触れてもらい素晴らしさを知ってもらいたいと思います。</li> <li>・プロジェクト立ち上げ当時は、メンバーから「何がしたいか」「何をどうしたいか」といった意見が出てこなかったもので、この先どうなるか心配に</li> </ul>

	<p>なりました。月日が経つにつれ、ポツポツとメンバーが発言してくれるようになったので、全体的に不満不安は少なくなっていったと振り返って感じます。決めなければ進まない会議では、率先して代表になったり物事を決めたりしましたが、それで本当に良かったのかどうかは自分でも分かっていません。自分一人で突き進んでも、後ろには誰一人いない…なんてことも辛いですからね。初めて会うメンバーもいるのも意見が言えない一因だったかも知れませんが、勇気を出して、素直に発言するのも良かったのではないかと考えています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・バラ文字を「綺麗」と言ってくれる人がいて作ってよかったなと思いました。</li> <li>・学園祭で初めて模擬店の販売の仕事をして緊張しましたが、緊張したのですが、とても良い経験ができて良かったと思っています。</li> <li>・薔薇園に行き、バラの種類を知ったり多くのことが学べました。花育では、ちゃんと作成でき良かったと思っています。学園祭では、バラの販売は赤字になりましたが、おしるこが売れて赤字を補てんすることができて良かったと思います。</li> <li>・プロジェクトは、日頃では学ぶことがなかなか出来ないことばかりでした。見学をしたりバラの育て方や種類、学園祭で販売したり、いろいろな体験ができてとても楽しかったこととゼミのメンバーとも協力し合って楽しく過ごせたことがとても良かったと思っています。</li> <li>・学園祭で、買い出しから売ることまでに参加することができ、楽しさや大変さを学ぶことができました。</li> </ul> <p>&lt;担当教員&gt;</p> <p>今年度は、花育士の講座をスタートに、花に親しむプロジェクトとなりました。学園祭には、新たにバラで文字を描いてみました。学生たちが、どのように描くかと思っていましたが、見事に表現してくれました。学生たちの秘めた力の大きさを感じたプロジェクトとなりました。</p>
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<p>①各学生を把握し、適材適所を見極めることを考えた。例えば</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新井 沙季は、iPad を使いこなすため議事録の入力を担当とした。</li> <li>・竹下 千尋は、周りに惑わされない考え方ができるためゼミ長をホロする立場に置いた。</li> <li>・鈴木 佑依は、ゼミ長としての責任感を持って発言と行動が出来た。時として自分の意見に固執する時があったが、積極的にまとめようとしていた。</li> <li>・畑野 友希は、言葉を発することが稀であるが、責任感があり、バラの店</li> </ul>

	<p>番を 2 日間頑張った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小清水 みゆは、多くを語らないが冷静に判断し、責任感があることから安心して会計を任せることができた。</li> <li>・金光 佑莉は、自ら積極的に行動しないが、決めたこと確実に実行するため安心できた。</li> <li>・浜戸 麻里奈は、物事をテキパキと行い、仲間にはっきりと指示することから物事がスムーズにできた。</li> <li>・松井 弓華は、メンバーとなかなか馴染めないようであったが、決められたことには文句も言わず協力する姿勢であった。</li> </ul> <p>秋学期になると動きが出てきたこともあり、教員は声掛けのみとしゼミ生同士の話し合いの機会を多く持たせ、協力し合わなければならない状況を作った。</p>
<p>学生の資質の向上度合についての感想</p> <p>次の 4 つの観点から</p> <p>(1) 主体性</p> <p>(2) 計画力</p> <p>(3) メンタルコントロール力</p> <p>(4) 傾聴力</p>	<p>(1) 主体性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①プロジェクト発表用のパワーポイント作成は、教員は助言のみ行いゼミ生全員で作成した。</li> <li>②LINE運営を学生が行った。</li> <li>③授業時間が作業に必要である時は、申し入れするようになった。</li> </ul> <p>(2) 計画力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①当初は、教員主導であったが、学園祭に向けた日程、当日の割り振りなどは学生主導で行うことができた。</li> <li>②プロジェクト発表計画も学生全員で考え取り組んでいた。</li> </ul> <p>(3) メンタルコントロール力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①学生間の問題も無く、出席も良く、落ち着いてプロジェクトに関わられた。</li> </ul> <p>(4) 傾聴力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①学生同士で意見の交換ができ、納得した上での行動が行われた</li> </ul>



2

2015年度中部圏産学連携会議  
ポスター発表資料

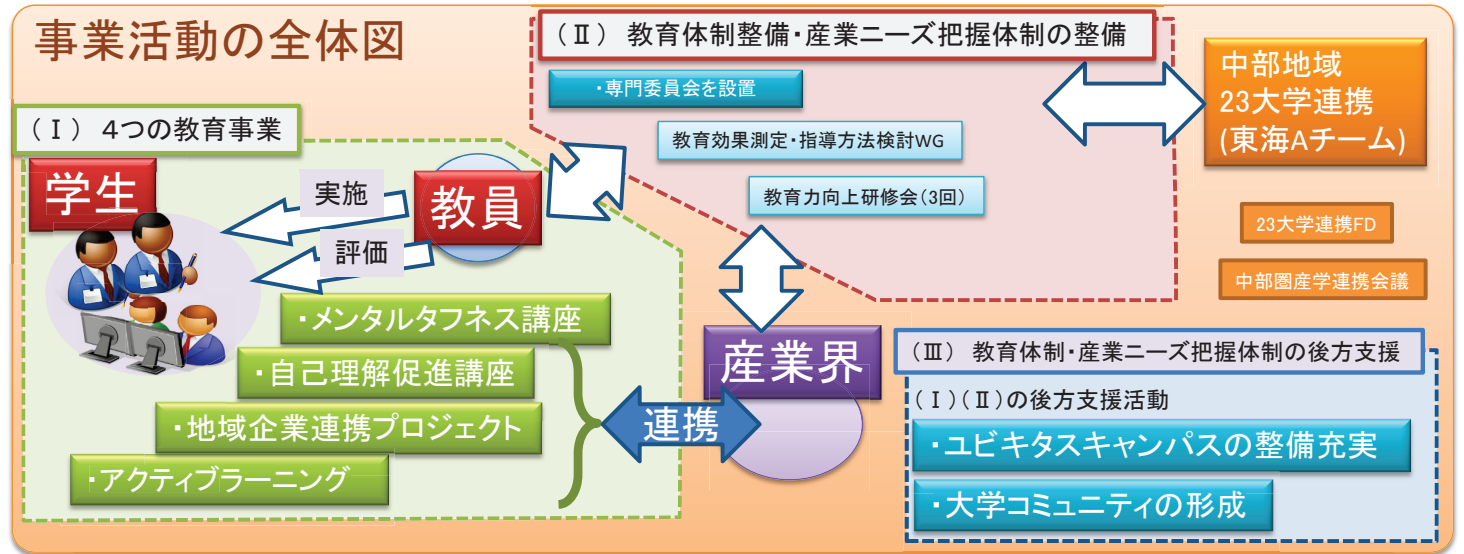




# 豊橋創造大学短期大学部 事業成果 地域産業界連携教育力改革プロジェクト委員会

産業界ニーズに対応した  
教育改善・充実体制整備事業  
(中部圏23大学連携事業)

『中部圏の地域・産業界との連携を通じた  
教育改革力の強化』  
・アクティブラーニングを活用した教育力の強化  
・地域・産業界との連携力の強化



## (I) 4つの教育事業の成果

### ◆メンタルタフネス講座(全2回実施)



概要/目的	メンタル面の強化を目的とした講座の実施
実施内容/方法	座学とグループワークを通じた理論の学習と体験
成果	社会人基礎力(前に踏み出す力、チームで働く力)の育成に寄与(アンケート結果より)

### ◆自己理解促進講座



概要/目的	企業側のニーズの理解、自己の就業観の形成と自己理解促進
実施内容/方法	バーチャル人事体験(採用面接官の疑似体験)
成果	自己理解の促進、社会人基礎力(前に踏み出す力)に一定の成果が認められた(アンケート結果より)

### ◆地域企業連携プロジェクト

概要/目的	PBL(Project Based Learning)を通じた問題解決能力・社会人基礎力の養成
実施内容/方法	地域企業・組織と連携した課題解決型学習の実践
産業界連携	地域企業、市役所、警察署等
成果	社会人基礎力の醸成に寄与(社会人基礎力評価シートより)

### ◆「アクティブラーニング」の手法を使った教育経験の共有

概要/目的	学生の主体性の引き出し、および学修成果の向上
実施内容/方法	科会での勉強会、授業科目への導入
連携	科目同士、教職員等
成果	教職員間での教育経験の共有を図ることができた

## (II) 教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備の成果

### ◆社会人基礎力育成体制の整備

教育効果測定・指導方法WGで育成すべき資質の行動規範を定め、評価方法の検討・改善を図った ⇒教育力向上研修会などを通して、専任教員へフィードバックし、改善内容の共有化を図った
教育力向上研修会を実施し、学生指導方法についての学習の方法を深化させた
<テーマ例> より良いPBL(Project Based Learning)指導を目指して



### ◆他大学との連携事業による教育方法の改善

本学ならびに他大学との実施状況確認等のためにミーティングへ参加し相互理解を図った。東海Aチームの連携FD活動として合宿研修会に参加し情報の共有化が図られた。

## (III) 教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援の成果

### ◆ユビキタスキャンパスの整備・充実



- 学内ICT環境の充実(無線LAN環境の整備)を図った
- 携帯情報端末の配布・利用支援ならびに、eラーニングシステムの導入・利用推進による教育体制を充実させた
- 「4つの教育事業」推進を支援するシステムの開発をし運用がなされた
  - ー各評価結果を蓄積・参照できる総合学修ポートフォリオシステムの開発ー
- 事業内容・成果の共有化および広報を目的としたWebサイトの構築を図った

### ◆大学コミュニティの形成による学生支援

- 就職体験報告会(短大OG交流)を実施し、卒業生との意思疎通が図られた



**sozo 豊橋創造大学短期大学部**

●キャリアプランニング科

〒440-8511 愛知県豊橋市牛川町松下20-1 地域産業界連携教育力改革プロジェクト委員会  
Web: <http://project.sozo.ac.jp/portal/> E-mail: [gp4@ml.sozo.ac.jp](mailto:gp4@ml.sozo.ac.jp)

# この3年間に実施した 27プロジェクト

豊橋創造大学短期大学部



「大学生コックさんのクッキング教室」  
協力：豊橋市子ども未来館 ここにて



女子力を活かし、絵画電車の止間提案  
連携先：豊橋鉄道株式会社



豊橋の特産品「ずら」をキーワードにして  
プロジェクトを展開する  
連携先：豊橋市経済所



お茶入門プロジェクト  
連携先：桜屋製茶 栄園茶舗



防犯プロジェクト  
働く意欲の向上を目指す取り組み  
連携先：豊橋警察署防犯課



発酵食品の美味しさを伝えるプロジェクト  
連携先：合名会社 小畑商店（株）ピッコウ



お菓子探検隊  
連携先：イトウ製菓



「体験型 和食」プロジェクト  
連携先：伊藤食品工業（株）名古屋本店 日本料理 やまもと  
豊橋市茶業園芸協会の（株）中野新穀商店



医療機関の掲示物の適正化  
連携先：井原正毅（医） 藤井公木戸病院（医） 藤嶋名 竹野産婦人科



We ♥ ROZE プロジェクト  
バラ生産農家と連携した青いバラの製作と販売  
連携先：（株）ティナー



豊橋うどんプロジェクト  
連携先：（株）東河電

### その他にも

- 豊橋の朝市を考えるプロジェクト  
（連携先：豊橋観光コンベンション協会）
- 身近な自然発見・発信プロジェクト  
（連携先：NPO法人 東三河自然観察会 愛知県三河港務所）
- 秋葉道・木の駅プロジェクトへの企画・調査協力・地域通貨アキハ券のPRと流通促進策の調査  
（連携先：NPO法人 穂の国森林探検事務所）
- 東三河エリアのイベントを伝えよう  
（豊橋警察署生活安全課）  
など

## 教員の声

いろいろな指導を学生たちにしても、一番守らなければならないのは「学生に決定権を残すこと」という基準を意識しながら指導をして、教員が出過ぎないように配慮をしている。

## 学生の声

- メンバーの団結
- みんなで協力できたこと
- 協調性が高められたこと
- 売り手と買い手のコミュニケーション
- 活動する際の、学生同士の気持ち、やろうという雰囲気・環境の大切さ
- いろいろ経験するのは大事だと思った。

3

大学教育改革フォーラム

in東海2015

発表資料



継続して行く  
地域連携についての課題

路面電車プロジェクト  
2年目の教員の気づき  
豊橋創造大学短期大学部  
伊藤圭一



女子力を活かした路面電車の企画提案

路面電車の企画はおしさん受けするものばかり  
そんな、東林短期大学のプロジェクトは始まりました



当初はお苦痛気分でした。  
駅通は物の世界、女子学生が楽し！と思つて行くと客席の特選を  
選んで、乗り降りイベントに参加していました。



企業との座談会を繰り返して学生が覚悟しました

座談会の結果、  
看板がつきました



座談会で奥側に意見を交換する位置に出た、提案で、豊橋駅前の電  
停に、乗り場案内が付きました。(毎日乗っている人には必要ない  
案内なのですが採用されました)

企業と教員での  
評価の違い



1年目の座談会  
企業と教員との評価の差がでてきた  
2年目はそれを克服すべく...継続しました。

2年目の挑戦①

企業の人との交流を深める  
座談会の回数を倍増!!  
①1年目よりも企業の方との座談会の回数を増やして交流を深めていき、企業の方が学生の成長を見やすいように工夫をしてみました。



2年目の挑戦②

学生に任せる  
②教員が口を出し過ぎて、中心人物が「イエス」という場面しかない場合が多かったのであるべく学生に任せて、教員は、じっと我慢をした.....



2年目の挑戦③

イベントに積極的に①  
撮影のしっかり行う  
(学生撮影)  
イベントに積極的に②  
楽しみながら積極的に  
(好きな広告電車を選ぶ企画)



2年目の挑戦④



途中から.....

看板みたいな  
目に見える  
成果物は  
.....

そして

企業とイベントに集中し過ぎてはいないか??

これは、自分たちでテーマを選んだのではなく、昨年からの継続だから、企業との距離感が保たなくて、どっぴりと連携にはまっていないか.....  
と言う不安が.....

それでも企業と学生からは

企業からは

- ① 学生に鉄道業というサービス業の在り方を理解してもらえた。
- ② 学生からの新しい発想で職場の活性化をすることができた
- ③ 1つにまとめることが企業で活動するとき大切なこと

学生からは

- ① 企業の方と接するときに学生の意見を1つにまとめるのが難しかった
- ② 先生の助言で1つにまとめることができた

1つにまとめる.....

企業にとって  
給料をもらう以上  
1つにまとめることは  
当たり前の事

ひとつにまとめるために  
必要なのは  
人の話を最後まで聞き  
本当に理解する事

学生にとって  
みんなの意見が尊重されるべきという教育を受けたきた学生には新鮮だったようです。

考えたことを1つにまとめることが大変だった。



1つにまとめる = 社会人として大切な力  
それは人の話を最後まで聞いて理解する能力にあること  
を今年の学生は理解をしたようでした  
(感想にそう書いていました)



# 4

## プロジェクト活動 連携企業・団体一覧





愛知県豊橋警察署

井澤医院

(有) イトウ製菓

伊那食品工業(株) 名古屋支店

木戸病院

こども未来館ココニコ

(株) 丹青社

(株) デイジー

豊橋茶業農業組合

豊橋鉄道(株)

(株) 中野新松商店

日本料理「やまもと」

(敬称略順不同)



5

各種発行パンフレット







# 6

## 行事实績一覽





【短大】平成26年度 地域産業界連携教育力改革プロジェクト 行事計画一覧

通年	①メンタルファネス育成講座」の実施	②「自己理解促進講座」の実施	③「プロジェクト活動」の実施	④アクティブラーニング共有	⑤連携推進	⑥ユビキタスキャンパス	⑦大学コミュニティ
4月		18(金) PROG受検結果報告会 (対象:1年生)	プロジェクトの企画開始 プロジェクトの活動開始 (準備が整った第1、2ゼミごと)	アクティブラーニングの知見の共有 (毎月定例の集会用)		16(水) プロジェクト管理システム利用説明会 ・プロジェクト管理システムの情報更新 ・各種システムのユーザーアカウント作成	・前年度卒業生就業状況調査の集計・分析 (～5月)
5月				21(水) アクティブラーニング勉強会(1)	17(土)10:00～ 第1回 東海A教育力チーム会議 参加 17(土)13:00～ ワークショップ「産学アクティブラーニングの発展に向けて」(主催:中部地域大学教育改革推進委員会【第1回連携FD】) 参加		
6月	31(土) ベネッセ講座 ・ベネッセ講座の結果測定・評価 ・セルフモチベーション講座の企画	20(金) プロジェクト実行計画書提出		18(水) アクティブラーニング勉強会(2)	28(土) IT+教育 最前線2014 セミナー 参加		
7月				16(水) アクティブラーニング勉強会(3)			
8月	30(水) セルフモチベーション講座	8(金) 中間報告書提出		6(水) 第1回教育力向上研修会 実施 30(土) 能動的学修の教員研修リーダー 講座(第1回) 参加	6(水) 第1回教育力向上研修会 実施 9(水) 同 同志社大学 シンポジウム2014 参加 28(木)・28(金) 東海A教育力チーム 連携FD合宿研修 参加		
9月	メンタルファネス講座の反省・改善点の検討			17(水) アクティブラーニング勉強会(4) 27(土) 能動的学修の教員研修リーダー 講座(第2回) 参加	3(水)・5(金) 平成26年度 教育改革CTI協議大会(主催:公益社団法人私立大学協会の教育研究会) 参加 24(水) 中部大学特別セミナー2014 参加		
10月				28(土) 能動的学修の教員研修リーダー 講座(第3回) 参加			25(土) 26(日) 27(月) 創造系卒業生就業状況調査 " 学内企業説明会 (OBによる説明の実施)
11月					15(土) 平成26年度 中部圏産学連携会議(主催:中部地域大学教育改革推進委員会) 参加 19(水) 産学協同就業力育成シンポジウム2014 参加		
12月		12(水) 成果報告書(学生)提出 17(水) 発表用パワーポイント資料提出 19(金) 成果発表会 19(金) 学生アンケートの実施	3(水)2限 公開授業 11(木)3限 公開授業 17(水) アクティブラーニング勉強会(5)	18(木) 第2回東海A教育力チーム会議 参加 26(金) 平成26年度達成目標に係る評価報告書提出		4(木)4限 携帯情報端末の物品確認 (対象:1年生) ・卒業生就業状況年次調査の実施 (～2月)	
1月		9(金) PROG実施 (対象:2年生) 自己理解促進講座(2日間) (1月～2月に実施)	23(金) プロジェクト最終報告書 (教員)の提出 23(金) 広報用原稿の提出		23(金) 平成24～26年度活動報告書提出		
2月		9(月)～10(火) 自己理解促進講座	18(水) プロジェクト反省会 (科会にて実施)				4(水)・25(水) OB・OG業界見学会 (OB・OGによる説明の実施)
3月				20(金) 第2回教育力向上研修会 実施	20(金) 第2回教育力向上研修会 実施 7(土) 大学教育改革フォーラム「東海2016(主催:大学教育改革フォーラム)東海2015実行委員会、名古屋大学高等教育研究センター) 参加 12(木) 第3回 東海A教育力チーム会議 参加		





平成 24 年度採択「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」  
『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』成果報告書 平成 26 年度版

平成 27 年 3 月 18 日 発行

編集発行 豊橋創造大学短期大学部  
地域産業界連携教育力改革プロジェクト委員会  
(渉外部キャリアセンター内)

〒440-8511 愛知県豊橋市牛川町松下 20-1

TEL 050-2017-2104

FAX 050-2017-2112

<http://www.sozo.ac.jp/>

